涼宮ハルヒの驚爆～替わる・ワンジョイン・ウィーク～

ソウスキー・セガール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
涼宮ハルヒの驚爆～替わる・ワンジョイン・ウィーク～

【Ｎコード】
Ｎ９７２８Ｆ

【作者名】
ソウスキー・セガール

【あらすじ】
フルメタル・パニック！シリーズと涼宮ハルヒシリーズの合作です。他サイトで書いていた物をコチラに移してしまいました。宗介とキョンが大変な事になってしまいます。そんな状態でも宗介の戦争ボケっぷりは炸裂でしょうか？でもやるときゃやりますよ、宗介だって。キョンは今作では巻き込まれた形では無いかも知れないですね。キョンから言わせれば巻き込まれた形なのかも知れませんが…。当然、話の中心には彼女らがいます！！そしてフルメタからは陣代高校の面々や＞ミスリル＜の面々、ハルヒシリーズからは谷口、国木

田、鶴屋さんから朝比奈さん（大）まで登場！……の予定です。他サイト時より豪華にするので、ぜひ読んで下さい！！

～プロローグ～（前書き）

正直、このサイトの仕組みが未だによく理解出来ていないので、おかしな部分があるかも知れません。

～プロローグ～

彼は意識を取り戻したとき自問した。

俺は誰だ？

俺は相良宗介。＞ミスリル＜作戦部西太平洋戦隊＞トゥアハー・デ・ダナン＜特別対応班（ＳＲＴ）所属の軍曹。コールサインはウルズ７。

今は任務で『千鳥かなめ』の護衛につくために陣代高校に通っている。

ここはどこだ？

学校の部室の様な部屋だが、陣代高校では無いようだ。

今はいつだ？

今は夜らしい。

窓の外が暗い。

だが、時計も無いうえ外は曇っていて月が隠れているので時間はわからない。

では俺はなぜここに？

思い出せ…

確か生徒会の仕事で他校にと行って、その帰る途中で…

そこまで思い出した時、横で女の声がした。

「あんたやっと起きたの！？いつまで待たせる気よ！？」

千鳥ではない。聞き慣れない声だ。

宗介は声の主の方に顔を向けた。

見た事の無い顔だ。この制服は確かと生徒会の仕事で行った学校の制服だ。

セミショートの黒い綺麗な髪に髪飾りをつけ、大きな目が彼を見下ろしている。

だが、知らない人間に対する宗介の第一声は決まっていた。

「誰だ？お前は」

「あんた、さっきのでこの団長の事も忘れちゃったワケ？」

「コノダンチョー？変わった名前だな…」

「ちが～う！！アタシの名前は涼宮ハルヒ！！このＳＯＳ団の団長！忘れたなんて言わせないわよ！…ってちょっとキョン！！聞いてるの！？」

彼は聞いていなかった。

いや、耳にいれる余裕がなかった。

彼は窓に映った自分の姿を見て愕然としていた。

彼が見た窓には自分、つまりの相良宗介の姿は映っていなかった。

かわりに全くの別人が立っていた。

彼は再び自問した。

俺は誰だ？

ここはどこだ？

俺が目を覚ましてまず最初に考えた事はそれだ。

とりあえず考えるまでもなく解った事はここが学校でも病院でもなく、誰かの家の部屋のベットの上だって事だ。

少し考えて、俺の部屋と長門の部屋って可能性も消えた。

長門の部屋は布団だしもっと質素で殺風景だ。

俺の部屋ならベットの枕元に犬だかネズミだか解らん様な変な黄色いヌイグルミは置いて無い。

更に思い出してみると、俺の最も新しい記憶で一緒に居たのはＳＯＳ団の連中だったはずだ。

つまりこの部屋は俺と長門以外のＳＯＳ団団員（ハルヒ・朝比奈さん・古泉）の誰かの部屋の可能性が高い。また部屋の雰囲気からいって多分女の子の部屋だ。

故に、おそらくハルヒか朝比奈さんの部屋だろう。古泉が少女趣味で無い限りはな。

なんか結構冷静だな、俺。

何があったのか全然思い出せないが、多分俺が何かの拍子に気絶して、その間に誰かが運んでくれたんだろう。

まぁ誰の部屋かなんて、この部屋と居間とを隔てていると思われるあのドアを開ければ解ることだろう。

結局俺の結論はそこに行き着きとりあえずドアを開けてみた。

…すると、…目の前に見知らぬ女性が立っていた。

「なんだぁ。あんた起きてたの？」

身長はハルヒより少し高いくらいか。
腰まで届く長い黒髪の先を赤いリボンでまとめている。
歳は俺と同じか少し上くらいだろうか。

俺は谷口じゃないが、ランク付けでもするなら最低でもAランクはあるだろう。
普段からあの部室で、朝比奈さんや長門、それにハルヒと過ごしている俺が言うんだ。これは信じて良いと思うぞ。

「ちょっとソースケ？聞いてるの？」

ソースケ？

いやいやまてまて。

『キョン』と呼ばれるならばまだ解るが『ソースケ』と呼ばれる覚えは無いぞ？
多分人違いでしょう。

「あんた、やっぱり頭強く打ち過ぎたんじゃないの？」

その時ふっとテーブルの上にあった鏡に目が停まった。その鏡には俺の姿は無く、変わりに全くの別人が映っていた。

どういうことだ？

まさかなんかの拍子に俺とこの人とが入れ変わっちまったってか？

……んなアホな…。

～プロローグ～（後書き）

今回は『涼宮ハルヒの驚爆～替わるワン・ジョイン・ウィーク～』を閲覧頂き、誠にありがとうございます。ＳＯＳ団、＞ミスリル＜、陣代高校生徒会、そして作者一同より、深くお礼申し上げます。
他サイトでは書けなかった結末まで、必ず仕上げたいと思っています。
どうぞ宜しくお願いします。

第1章～きっかけ～

とりあえず現状を知る必要があるな。
俺の意識が入っているこの男、確か、『ソースケ』……とか呼ばれてただろうか？
一体どんな野郎でどんな性格でどんな話し方でどんな生活をしててとか全くわからんし分かる気もあまり無いが、こんな事になったきっかけを聞き出しといた方が良いだろう。

「あの、俺は何でここにいるんです？」

「あんた、覚えてないの？」

おかげさまでね。

「生徒会の用事で県立の北高校に行ったのは覚えてる？」

いいや。
ここで「はい」と答える奴は詐欺師かそれに順ずる何かだ。
ていうか俺は本来北高の生徒だからこれはまだ事故が起こる前の事だろう。

「しょうがないわね。いい？ちゃんと聞いて思い出しなさいよ？まず昨日の昼休みに先輩に呼び出されて……」

ここからは彼女の回想である故、俺は一旦休憩するよ。

はい、回想モードスタート。

……

……

……

……

……

事件が起こる前日の陣代高校。
今はちょうど昼休みになったところである。

陣代高校の昼休みは一種の戦場である。

この学校には食堂が無い。
従って、４時限目終了のチャイムと同時に出張販売のパンをいち早く買おうと、パンを求める生徒たちの波が出来るのだ。

千鳥かなめは、そんな戦場の中の猛者達の一人だった。
そしてその日もチャイムと同時に教室を飛び出し、廊下を激走し、生徒でごった返している階段を避けて窓から飛び出し、駐輪場の屋根に着地して爆走し、地面に着地してから更にスピード上げ、ぶつかりそうになった一年の女子を驚異的なフットワークで回避し、正

面玄関の脇で行われている『ハナマルパン』の出張販売で、コロッケパンとカスタードパンの購入に成功していた。

遅れて来たクラスメートの常盤恭子は、彼女のあまりの早さに驚きながら、

「カナちゃん、相変わらず早いね～」

「前にも言ったでしょ？売れ残りのコッペパンはゴメンだって」

「そだっけ？」

「そーよ」

そこに、一人の男子生徒が彼女を追って来たかの様に現れた。なにを隠そう、陣代高校生徒会で『特別会長補佐官』などというなんとも怪しげな役職を任されている２年４組の傘係兼ゴミ係、相良宗介その人である。

「千鳥、やはりここにいたか」

「ソースケ、あんたもパン？もうあんときみたいな事はしないでよね」

「違う。会長閣下がお呼びだ。可急的速やかに生徒会室に集合とのことだ」

「なによその軍隊みたいな呼び出しの仕方は…。それにわたし、お昼なこれからなのよ？食べ終わってからでも良いでしょ？」

「会長閣下の御命令だ。致し方あるまい」

「しょーがないわねぇ。キョーコ、ちょっとこれ持って先に教室戻ってて」

そう言うと、かなめは戦利品のコロッケパンとカスタードパンを恭子に預けた。

「うん。カナちゃん大変だね。頑張ってね」

「何を頑張んのよ？何を」

かなめはそう恭子にツッコミを入れつつ、宗介と生徒会室に向かった。

生徒会室には既に生徒会長である林水敦信がいた。この日もまたいつもと変わらぬ、長身、白皙、怜悧な風貌の青年である。

「参りました！会長閣下」

宗介が敬礼をして報告する。

「ご苦労、相良君、千鳥君。さて…、いきなりで申し訳無いが、明日、この学校まで行ってきて欲しい」

そう言って林水は二人に紙切れを渡した。そこには学校までの地図が載っていて、地図の横に何かゴチャゴチャとメモ書きがある。

「行き方は君達に任せる。タクシーを使っても良いし、一般の交通

機関で行っても良い。ただ、帰りは少々大きな荷物を持って来て貰いたいので、帰りはタクシーを使うと良いだろう。交通費はC会計から出す。安心したまえ」

C会計。

それは、陣代高校生徒会に代々伝わる、教職員には秘密裏になっている予算である。

元々は大した額では無かったのだが、彼が一年生で会計に就任した際、何をしたのか、その一年で１０倍の額まで増やしてしまったらしい。

「ちょっと待ってください、学校はどうするんですか？」

「安心したまえ千鳥君。学校側は公欠扱いにしてくれるそうだ」

「あっ、そりゃそうですよねっ、ははは…。でも荷物運びくらいなら業者に頼めばいいじゃないですか」

「いや、本来の目的は荷物では無い。その学校に行って生徒会長と会って来て貰いたい。話して来て貰いたい内容は全て地図の横に列記しておいた」

「先輩が行けばいいじゃないですか…」

そう言われた林水は中指でメガネをクイッと上げていった。

「私はこれから、多摩地区高校自治連絡会の事務所まで行かなければならない。更に明日は、そこの会議で議長を勉めなければならないのだ。君が代わってくれるのなら、それでも良いのだが？」

「行きます行きます！！そんな風に言わないで下さい！」

「そうか、では、頼んだよ」

そう言われると宗介は再び敬礼をして、

「了解しました！！万一襲撃を受けたときは、あらゆる手段を使って機密を死守する所存です！！」

かなめは『まぁた、なんか勘違いして…』と思ったが、今はそれよりも恭子に預けたコロッケパンとカスタードパンが愛しかったため、ツッコミはしなかった。

…彼等はこうして行くことになったのだ。
ＳＯＳ団の待つ（？）、県立北高校へ……。

その翌日、つまり事件が起こる今日の事である。

宗介とかなめは目的の学校が昼休みになる時間帯に着く様に家を出た。
交通費は出してくれると言うので、林水のお言葉に甘えてタクシーで行くことにした。

「ソースケ、学校着いたら暴れないでよ」

「ん？どう言う意味だ？」

「だから、いつもみたいに銃ぶっぱなしたり手榴弾爆発させたりしないでって事」

「しかし万が一向こうの生徒にテロリストが紛れ込んでいたらどうする」

「そんな事ある訳無いでしょ！」

「これだから君は、いや、日本人は危機管理意識が低いと言われるのだ。常に最悪の場合を想定して―」

「やかましい！！ダメって言ったらダメ！！分かった！？」

「…了解した」

「…先に言っとくけど、銃と手榴弾だけじゃないからね。武器関係全部だからね」

「……了解した」

「……」

「……」

「……」

「……」

しばしの間沈黙が二人を包んだ。
そして、
「…千鳥」
「ダメ」
「…俺はまだ何も言ってないぞ…」
「どうせ『1つくらい良いだろう』とか言うんでしょ」
「違う」
「じゃあなに？」
「これから行くところは、俺たちにとってはアウェイだ。校舎の構造や配置などを把握出来ていないので、いざ、何者かに襲われたとしたら、戦術的に有利なポジションや逃走経路を確保できる自信が無い」
「…何を言ってるの、あんたは」
「だから、なにかあったら、荷物を捨てて全力で脱出しろ。その間は俺が囮になって敵を引き付ける」
「…あんた、さっきのあたしの話訊いてた？」
「ん？何の話だ？」
かなめは宗介に、力の限りのチョークスリーパーをかけた。

チョークスリーパーから宗介が解放される頃、ちょうど目的地の北高に、タクシーが到着した。

…

……

……

……

……

「なんとなく思い出してきた？」

思い出してきたかと聞かれてもなぁ…。
でも今日の昼休みにどっかの学校の人が来てると思ったらあなた達だったんですね。
それにしてもうちの学校なんかに何の様があったのかねぇ。
まぁ状況から察するに『激しくぶつかった向こうの生徒』ってのは多分俺の事だろう。
次の問題はこの後どうするか…だな。

……えっ？

俺の回想も聞かせろと？

なんて言ってる方も思ってる方はそういないとは思うが、もしかしたら天文学的確率でいるかも知れんし、いたときに『何でキョンの回想だけやらんのだ！？』なんて言われると作者が困る。

まぁ最後のは俺には関係ないんだが…

とにかく、諸々の事情により俺も回想させて頂く。だいぶ思い出してきたしな。

ちなみに次の章までとばしてくれても構わん。

まあ俺の回想は今日、つまり事故当日の朝まで遡れば大体解るだろう。

はぁ、やれやれだ…。

……

……

……

……

……

つー訳で今朝から話を始めるとしよう。

今日も無意味に山の上にある学校目指し強制早朝ハイキングコースを登りながら、出来れば今日は平和に過ごしたいなぁ等とハルヒに関わってしまっている時点で不可能な願いを特に意味も無く考えながら学校に着いた。

教室に入るとやはりハルヒが先にいたんだが、なぜかハルヒは鬱々まっ盛りな空気をかもしだしていた。

俺の小さな願いは、早くも潰え去ったと言っていいだろう。

今日はあまりハルヒに声かけないほうがいいだろうか…

しかし俺か自分の席につくとハルヒが声をかけてきた。

「キョン、退屈だわ。」

そりゃ1年365日もあれば退屈な日もあるだろうよ。むしろ楽しい日が多いヤツの方が少ないと思うし、そういうヤツはきっと幸せ

なヤツなんだと思うね。
そしてこの考えでいくと俺は残念な事に幸せなヤツの部類に入ってしまうのだろうか。ＳＯＳ団が出来てから俺は退屈なヤツがむしろ羨ましいくらいだからな。ハルヒはどうかしらんが。

「そんなこと言ってんじゃないのよあたしは！」

わかってるよ。ただちょっと考え方を変えてくれるかなぁなんて思っただけだよ。

「なんか面白い事でも落ちてないかしらねぇ。宇宙人が降ってきたり、異世界人がなんか悪さしたりさ」

う～ん、経験からするとこういうときは必ず何か起こるんだよな…。大した事で無ければ良いのだが…。

その時は心からそう願ってたんだが、どうやらその願いは届かなかった様だな…。

ハルヒの鬱エナジーを背後から浴びながら、今にも４時限目を終えようとしていた時の事である。
ふと校庭を見ると他校の生徒約２名が我が校に入ろうとしていた。

「どこの生徒だ？」

声に出したのがまずったか、今さっきまで背後から浴びていたハルヒの鬱エナジーが消えていた！

「キョン！これは事件よ！」

ハルヒの目が輝いている。どうやら暇潰しを見つけた様だ。良くない兆候だ。

「何が事件なんだ？」

「あの２人はきっと我がＳＯＳ団をのっとりにきたのよ！」

話が飛躍しすぎている。何がどうなったらそう解釈出来るんだ？大体あんな団をのっとろうなんて長門の親玉だって思わねーって！

「調査の必要ありね。行くわよキョン！」

「ちょっと待て！まだ授業中だぞ！」

「いーから来る！」

いや、良くねぇって！

俺はハルヒに襟を捕まれ引きずられながらズルズルと授業中の教室を後にした。

…まったく、やれやれだ。

校内に入って来た他校の生徒２名をハルヒとグルグル歩いて捜しまわっていた。

きーんこーんかーんこーん…

４時限目終了と同時に昼休みを知らせるベルがなっている。
本当は教室で飯にしたいのだが、この状態ではそれも叶いそうにない。

「キョン、いた！ほらあそこ！」

ハルヒが指さした先には他校の生徒２名が生徒会室に入っていったところだった。
それからハルヒ君。君は子どもの時に人を指さすなって教わんなかったのかい？

「で、どうするんだ？生徒会室に入ってったぞ。やっぱ違ったんじゃないか？」

「あんた、そんなことも分かんないでついてきたの？」

ついてきたんじゃなくて連れてこられたんだよ。他ならぬお前に強引にな。
だからこれからお前がしようとしていることを俺が分かる筈もない。分かりたくもない。

「あの２人を取り押さえるに決まってるじゃない！」

おいおいちょっと待てよハルヒ！そんな物騒な事するつもりだったのかお前は！？そんなことしてもし違ってたらどうするんだ？つーか絶対違うけど！

「落ち着きなさい、キョン」

お前が落ち着けよ！

「いい？キョン。あいつらが生徒会室から出てきた瞬間に捕まえるわよ」

例によってコイツは俺の意見など聞く耳持たずである。
そういえば、いつものハルヒなら問答無用で突入するのに、今日は何故かいつもより控え目な気がする。
コイツも学習したんだろうか。

「おや、何をしているのですか？お二人でこんなところで」

そう声をかけてきたのはエブリディ０円スマイルの古泉である。隣にいるのは長門か。この二人が一緒にいると必ずと言って良いほど良くない事が起こるんだよな…
プラスにマイナスを掛けてもプラスにならないのと似た原理だ。

「僕たちはたまたまそこで会っただけですよ。ねえ、長門さん」

長門は無表情の顔をほんのわずかだけ縦に振った。

「長門さん、お二人のお邪魔をしては申し訳無いですし、早いところ退散しましょう」

おいちょっと待て古泉、変な誤解を招く様なこと言うなよ。
それから作者！！長門が無口だからって台詞皆無ってのはあんまりにも酷いんじゃあねぇか！？

「あれ～っ？みなさんこんなところで何してるんですか～っ？」

朝比奈さんだ。今日も相変わらず可愛らしい…
…が、あなたまでなぜここにいるんですか？

「みんな、良いタイミングに集まって来たわね！」

いや、全然バットタイミングだからな。
ナイスタイミングとか思ってんのは、多分ハルヒだけだぜ。自覚しなさい。

「今あそこに我がＳＯＳ団をのっとろうとしてる奴らが入ってったの！取り押さえるわよ！」

「成程、そういう事でしたか」

何が成程なんだよ古泉！？お前は一体何を納得したんだよ！？

「あの～、なんで捕まえなきゃいけないんですか～？」

ナイス質問です！朝比奈さん！
しかしハルヒの事だ。朝比奈さんの質問は―

「いいから協力しなさいっ！みくるちゃん！」

「はっ、はい～っ」

やっぱり玉砕かよ…。

「有希も古泉君もいいわね！？」

「・・・・わかった」

「ええ、もちろんです」

例によって誰も反論しないのか。誰かおかしいと思わないのかね。

そんな事をしているあいだに生徒会室から他校の生徒2名が出てきた。ハルヒはマジでやる気の様だ…。

「・・・・気をつけて」

長門、お前はいつの間に俺の横に来たんだ？それに『気をつけて』ってお前に言われるとけっこう心配になるじゃ―

「よしキョン！行ってきなさい！」

ハルヒのやつ、俺の考えがまとまる前に両手で押し出しやがった！

俺は神風特攻隊かよ！？

……あれ？

たいして強く押された訳でも無いのに結構な勢いが―

それになんだ？この引っ張られる様な感覚は―

なんかどんどん勢いが増して来て―

しかも止まれねぇ！

やべっ！ぶつか―

…

……

……

……

……で、今の状況に至ってしまっている訳だ…。

やれやれだろ？

第2章～それぞれのこれから～（前書き）

遅蒔きながらちょっと説明を。
『～（）～』の枠で始まる時はキョンが語り部です。
『～□～』の枠で始まる時はキョン以外が中心に話が進みます。

第2章～それぞれのこれから～

～［北高・文芸部部室］～

数々の修羅場をくぐりぬけてきた宗介だが、こんな経験は初めてだった。

体が入れ替わるだと？

そんな非現実的な事が実際にあるものなのか？

「ほらキョン！帰るわよ！」

この女、涼宮ハルヒと言ったか？

どうやら敵ではない様だが、俺はこれからどうすればいい…。

未知の経験に宗介は完全に戸惑っていた。

ガチャッ

一人の男が部屋に入って来た。

「おや？お二人とも、まだいたんですか？」

「あ、あれ？古泉君、先に帰ってたんじゃないの？」

どうやらこの男は古泉と言うらしい。

「ええ、そうなんですが、ちょっと忘れ物がありまして。ちょうど良かった。貴方にお話があります」

そう言いながら古泉と呼ばれた男は宗介の方をなにやら意味深な表情で見ていた。

いや、宗介の意識としては宗介の方で間違いないだろうが、他者からはこのキョンとかいう男の方を見ている事になる。

「なに？男同士の友情話ってヤツ？」

「まぁ、そんなところです」

「あ、そ。わかったわ。あたし先帰るから、鍵よろしくね」

涼宮ハルヒがいささか不機嫌そうに部屋を出た様に宗介には見えたのだか、それが何故かは宗介にはまったく分からなかった。

そして古泉と呼ばれた男は、涼宮ハルヒが完全に立ち去った事を入念に確認してから、宗介が入れ替わった青年に向かって話し始めた。

少なくとも、最初の内は宗介はそう思っていた。

「今日は閉鎖空間覚悟のようですね。まぁ、上からはそれでも貴方にお話しろとの命でしたので、仕方ありません」

「話とは何だ」

もちろん宗介は何時襲われても良い様に、警戒心剥き出しの、戦闘体制状態である。

相手の素性が解らない以上、警戒を怠る訳にはいかないのだ。

だが、次の古泉という男の一言で、彼は一瞬驚愕した。

「そうそう、自己紹介がまだでしたね。古泉一樹です。よろしくお願いします、相良宗介さん」

古泉一樹と名乗った男の発言に、宗介は興奮しそうになるのをどうにが抑えながら言った。

「……貴様、……なぜ俺の名前を知っている。どうして俺が相良宗介だと分かった…。今の俺を相良宗介だと認識するのは不可能な筈だ…」

彼の言う通りなのだ。
見た目は愚か、今の状況になってろくに会話も交わしていない彼を相良宗介と呼ぶ要素はどこにもない。彼は今、別人と入れ替わってしまっているからである。
しかしこの男、古泉一樹は彼の事を相良宗介と呼んだ。

「先に言っておきますが、僕は敵ではありませんよ。むしろ味方です。貴方には、早いところ元の体に戻って頂きたいというのが、僕の所属する機関の考えです」

「なぜ俺の名前を知っているのか訊いている」

宗介はその気になれば素手で古泉を捕まえ、尋問する事も殺す事も可能だった。
だが、古泉は明らかに自分よりも自分の状況を把握している。
おまけに現状、宗介は武器を一切持っていない。相手が銃を隠しているとも言い切れないので、行動を起こせないのだ。

「あぁ、そうでしたね。実は、我々機関の人間に＞ミスリル＜に所

属する人間がいるんです。そこから情報を貰った訳なんですよ。貴方はなかなか興味深い経歴をお持ちの様ですね。ぜひその辺の武勇伝をお聞きしたいのですが、今日はその話をしに来た訳ではないので、また次の機会があったときにでも」

古泉一樹は笑顔でお辞儀をしながら言った。

「お前はどうすれば俺が元の体に戻れるのか知っているのか？」

「残念ながら、それは現在調査中です。しかし、衝撃によって入れ替わってしまった訳ではないのは確かなので、また激しくぶつかったとしても、元に戻る事はないでしょう」

「では貴様は何を話しに来た」

「話というより、お願いに近いでしょうか。元に戻る方法が分かるまで、相良さんには彼として生活して頂きたいんです」

そう言いながら古泉一樹は宗介の方に手を向けた。

古泉と名乗った男が言った“彼”とは、今、宗介が入れ替わってしまっている“キョン”と呼ばれている男の事だろう。

「なぜだ？」

「なぜ、ですか…。いえ、理由ならちゃんとあるんですが、貴方のような人間は恐らく証拠を見ない事には何を言っても……！！！」

その時、宗介は古泉一樹が一瞬険しい顔をしたの見逃さなかった。

そして彼は少し考え込んだあと、

「少し僕と来て頂けますか？貴方の問いに分かりやすく答えてあげますよ」

「…いいだろう」

そう言うと、二人は部室を後にした。

～（東京都調布市タイガースマンション）～

大体の事を思い出した俺は一刻も早く元の体に戻りたかったが、この状態で自宅に帰っても不審者扱いされるだし、帰り方も分からな

いし、分かったとしてももう電車が無くなる時間だ。
それに他人の金を勝手に使うのは俺の意に反する。
なので、今日のところは相良宗介とやらの家にお邪魔することにした。
彼の家の場所も分からなかったが千鳥さんに教えて貰ってたどり着くことが出来た。歩いて数分とかからない向かいのマンションだ。

なんともまぁ随分ご近所にお住まいなんですねぇ。
相良も千鳥さんと一緒で独り暮らしの様で、その方が俺にとってもいろいろと好都合だ。

そんな事を考えながら相良の家にお邪魔したんだが、玄関のドアを開けて電気をつけた瞬間、俺はビビったね。

玄関のすぐ横の壁に…

銃が立掛けてある。

それもいくつも。

普通、玄関に立掛けるなら傘だろ？
銃だぜ？
多分モデルガンだろうけど、明かりをつかた瞬間にこれがあったらさすがに少しはビビるよ。

部屋の奥に行くと長門の家よりはまだ紙一重でマシかも知れないが、それでも十分過ぎるほどに殺風景で、生活観というものとは『ホントにここで暮らしてるのか？』と疑いたくなるほどに縁遠く、窓際の机の上に変な機械とノートパソコンが置いてあるだけだ。そして居心地と言う点では絶対にこの部屋はアウトだ。なんか火薬とオイルの臭いがする。

これは実際見てみないと分からないものがあると思うが、俺は長門の部屋の方が圧倒的にマシだと思うね。

部屋の、まさに文字通りの殺風景さに半分呆れていた時、相良の携帯が鳴った。

出て良いものなのか考えながら発信者の番号を見ると見覚えのある番号だった。

……まさか。

俺は逸る気持を抑えつつ電話に出た。

「もしもし」

『・・・・・・』

「もしかして、長門か？」

『・・・・わたし』

やっぱりか。

「なあ長門、これにもまたハルヒが関係してるのか？」

『詳しい事は不明。しかし現段階では無関係と思われる』

「じゃあただの事故か」

『そうではない。あなたが相良宗介と衝突する数分前から情報生命体による空間情報操作を感知した。恐らくそれが原因』

情報操作？

『それによってあなたと涼宮ハルヒの周りに、わたし・古泉一樹・朝比奈みくるがあつめられ、あの事故が起ったと思われる』

「なんでお前まで集められたんだ？情報操作ならお前は防げたんじゃないのか？」

『情報生命体によってわたしの情報操作能力が制限されていたため、防ぐことは不可能だった』

「情報生命体ってのは？」

『それはまだわからない。でもこの状態になったのはその情報生命体が原因なのは確か』

まったく、ハルヒが原因ならまだわかりやすかったが、長門でも正体がわからない相手の仕業ときたか。

余計にややこしいな。

「で、どうしたら俺は元の体に戻れるんだ？」

『それもまだわからない』

…その時、外を走る車の音がやけに大きく聞こえた。

「じゃあ俺はこれからどうすれば良い？」

『あなたがあなたでないと涼宮ハルヒがわかるとどんな情報爆発を起こすかわからないため、相良宗介には元に戻る方法がわかるまであなたのふりをするよう古泉一樹が説明に向かっている』

古泉が？

あいつにまかせて良いものかね。

『あなたも元に戻る方法がわかるまで、相良宗介のふりをするのが望ましい。しかし相良宗介が相良宗介でないと明らかになったとしても涼宮ハルヒには特に影響が無いため、無理をする必要は無い』

「何人かにはバレてもいいって事か？」

『そう』

なるほど、つまり入れ替わったのは事故のせいじゃなくて宇宙電波的なもんのせいで、その正体が分からなければ元に戻る方法もまだ分からんと。

だからそれがわかるまでそれぞれのふりをしてろって事か…。

「そうか…。わかったよ長門。ありがとな。なんかあったらまた連絡くれ。俺もなんかあったら連絡する」

『わかった…最後に、もうひとつだけ』

ん？なんだ？

『必ずわたしが何とかする。安心して』

…ああ、頼りにしてるぜ、長門。

そうして俺は電話を切った。

…だがマンガやアニメじゃあるまいし、体を交換しての生活だと？

明日からの事を考えると、気が引ける。

なぜかって？

マンガやアニメでこう言う展開になった時は、大抵良いことが無いからさ。

…やれやれ、冗談じゃないぜ。

〜［県郊外市街地］〜

彼らはタクシーの車内にいた。

キョンの姿をした相良宗介に現状を分かってもらうために確たる証拠を見せようと、古泉一樹が連れてきたのだ。

走る車内で古泉は宗介に、キョンにした話と同じ話をしていた。

古泉は『彼にあの場所へ連れていった時の事を思い出しますよ』とか『同じ人物に二度も同じ話をしている気分になりますね』などと言いながら話していたが、宗介はあまり真面目に聞いてはいなかった。

宗介が古泉について来ているのは、いかれた話を聞くためでは無い。
古泉が持っている情報を聞き出すためなのだ。
そんな宗介は古泉を哀れむ様な目で見ている。

当然だろう。

いきなり『実は僕は超能力者なんです』とか『涼宮さんには願望を実現させる能力がある』などと言われて、信じる人間はそういない。

ある程度話し終えたところで車が止まった。
どうやら目的地に着いた様である。
古泉は車から降りて言った。

「着きましたよ、ここです。まさか住所まであの時と同じとは、偶然とは恐ろしいですね。それとも、これも涼宮さんが望んだのでしょうか？」

冗談半分のつもりなのか、古泉の表情は先程とはまた違った笑みを浮かべている。

タクシーから降りたそこは、人通りも車も多く、デパートなどの建築物も多い、地方都市のスクランブル交差点のど真ん中だった。

「ここに何があるというんだ」

「目を閉じて、手を出して貰えますか？」

「拒否する」

「それでは貴方に話の続きをお話する事が出来ません。ここから先

は、そうして頂くかないと行けないのでね」
古泉にそう言われた宗介は、周囲への警戒心をより強めながら、しぶしぶ目を閉じた。

「…もう目を開けて頂いて結構ですよ」
宗介はゆっくりと目を開けた。
「……っ！！！！」
そこは、誰もいない不気味な静寂の、灰色に染まった世界だった。
「次元断層の隙間、我々の世界とは隔絶された、閉鎖空間です。僕の能力というのは、この閉鎖空間を探知し、侵入する事。そして―」
そう言いながら古泉が指をさした先には、青く光る巨人が今にも立ち上がろうとしているところだった。
「―そして、あの巨人を倒すことです。我々はあの巨人を＞神人＜

と呼んでいます。そしてその周りに飛んでいる紅い光球は、僕の同志たちですよ。さて、そろそろ僕も参加しななければ…」

そう言いながら古泉も紅い光を放ちながら徐々に光球化していった。

「……いかがでしたか？」

彼らが今いるのは帰りのタクシーの車内だ。

あの巨人、＞神人＜は光球化した古泉ら機関とやらが撃退した。

古泉一樹の話によれば、涼宮ハルヒの精神状態が不安定になったときにあの空間と巨人が現れ、ほっておくと世界が崩壊するらしい。

そしてこのキョンなる青年は涼宮ハルヒにとっての鍵らしく、今、宗介とキョンが入れ変わってしまった。

この事が涼宮ハルヒに明らかになると、何が起こるか判らないため、元に戻る方法が分かるまでキョンのふりをしていて欲しい、との事だった。

宗介は、実際にあんなものを見せられ、更に今の状況を考えた上でこう答えた。

「……今だに信じれんが、元に戻る方法が分かるまで、協力してもいい」

「ありがとうございます」

古泉は彼をキョン宅前で降ろして、

「明日は学校ですが、行き方はわかりますか？」

「…ああ」

「そうですか、わかりました。貴方には、まだ話したい事が多々あるんですが、それはまた後日にしましょう。考えをまとめる時間も必要でしょうし。ではまた明日」

そう言うと、古泉はタクシーに乗って行ってしまった。

彼が家のドアを開けると、ずいぶん小さな少女が勢いよく彼を迎えにきた。

「おかえりキョンくん！」

「……ああ」

どうやら、この少女は妹の様だ。

「…？どうしたのキョンくん？なんかへんだよ？」

「…肯定だ」

「……？？？」

「…この男の、いや、俺の部屋はどこだった？」

「…えっ、こっちだよ」

そう言って妹は階段の上を指した。彼は指された方に歩き出しながら、

「…そうか。感謝する」

そう言って部屋に入っていった。

「ねぇ～！キョンくんがへんだよ～！」

妹はそう叫びながら居間の方へ走っていった。

宗介はかつて無いと言っていい程に混乱していた。

こんなに彼を混乱に陥れたのは香港の事件以来だろうが、その時とはまた意味が違う。

本当にその涼宮ハルヒの望んだとうりになるのなら、戦争など起こらないのではないか？

俺たちが今までしてきた事は一体何だったのだ？

しかし一樹が言っていた『彼女の希望と常識論がせめぎあっている』という言葉が脳裏をよぎる。

では涼宮ハルヒは、常にどこかで戦争が起こっている事を常識と認識しているのか？

そんな事を永遠と考えているといつのまにか……

次の日の朝を向かえていた。

第3章～交換生活－その1－～

～（相良宗介宅）～

翌朝。

俺は妹のボディプレスをくらう事なく目が覚めたが、爽快な朝とは気分的に言い難い。
時計を見ると6時少し前だ。俺にしてはやたらと早く起きたな。
いや、この時間なら平均的に見ても相当早い方だろう。

起きた時点で俺の部屋でなかった事から既に諦めてはいたが、念のため洗面所に行って鏡と向き合った。
なんというか、鏡に写っていたのはやはり俺ではなかった。
頬をつねってみたが痛いだけだ。ああ、昨日の事は夢じゃなかったんだなと確認させられる瞬間だ。

しょうがない。まだかなり早いが二度寝する気にもならんし、相良のふりをして学校へ行く準備でもするか…。

…ん？

学校？

そういえば…。

相良の学校ってどこだ？

～［キョン宅］～

一睡も出来ないまま朝を迎えた宗介は、とりあえずキョンのふりをして学校へ行くことにした。
まだ６時前と少し早いが、今の彼は他にする事が見当たらなかった。
学校へ行く準備を始めようとベットから立ち上がった宗介はふと思った。

この男（キョン）は俺の部屋で寝たのだろうか…？

彼の家には、拳銃やライフル等の銃機類、手榴弾や地雷、スタングレネードやプラスチック爆薬等の爆発物、更には機密情報の入ったノートパソコンと通信機、ｅｔｃ．…。

それらを素人が好奇心で触れたりしたらどうなる？

…非常に危険だ。

宗介は急いでキョンの携帯電話を手に取り、自分の携帯電話の番号を打った。

プルルルル……
プルルルル……
プルルルル……
プルルル
『もしもし』
「お前がキョンとかいうヤツか」
『それはあだ名だ。しかしそれを知ってるって事は…。それにその声、まさかお前…！』
「お前と入れ替わってしまった相良宗介という者だ」
～（相良宗介宅）～
ちょうど良かった。
俺も相良氏の学校までの行き方その他諸々を聞きたいと思っていたところだ。
しかしここはまず電話をかけてきた方の話を聞くのが礼儀というものではなかろうか。
少なくても俺はそう思うね。
で、相良だったな。

こんな朝っぱらに何の用なんだ？

『お前は軍隊経験はあるか？』

・・・・・・は？

いきなり何を言い出すんだコイツは…。

俺はまだ１６歳のごく一般的（？）な高校一年生で、今までの１６年間だってごく一般的な日本国民の生活を送ってきた（あくまで過去形）。

徴兵制度が無いこの日本で、俺と同じ年の軍人なんか居る筈がない。

つまり俺の答えは

「ＮＯ」だ。

『そうか。ではよく聞け。大事な話だ』

そういって相良氏は猛烈な勢いで話し始めた。

『銃器類には絶対に触れるな。全て実銃だ。安全装置はつけてあるが、下手に触れると誤差動を起こして暴発する危険がある。それから棚は開けるな。銃の部品や実弾の他に、手榴弾や地雷、プラスチック爆薬やスタングレネード等の爆発物が入っている。これらも本物だ。また、窓の前のノートパソコンと通信機。機密事項なので詳しくは言えんが、絶対に触れるな。もしこれに触れるような事があればお前を殺さなくてはならなくなる。あと、お前が学校から戻ってくる頃には既に居ると―』

「ちょちょちょ、ちょっと待ってくれ！」

俺は自分の声で危ない事を語りまくる相良を一旦遮った。

「つまりその辺の物に下手に触れるなって事か？」

『そういう事だ』

あのなぁ、自分の家を荒らされたくない気持ちはよ～く分かるが、それでは嘘があまりに下手過ぎるんじゃないか？

銃だの爆弾だのを普通の日本の高校生が持ってるなんて、普通は信じないぜ？

『俺は嘘など言っていない』

「じゃあなんでそんな物騒なもん持ってんだよ」

『君には知る資格が無い』

資格だぁ？

要は禁即事項って事なんだろうが、こいつの言い方は妙に腹立つ。

俺は適当に「そうか」「わかった」などと言って話を自分の用件の事に変えた。

～（陣代高校）～

早朝、相良の随分と飛んだ警告の後俺は陣代高校までの経路を聞くと『千鳥について行け』という事だった。

俺の部屋で荒らされて困ることは特に無い（まあこれは相良が常識的な行動をとると仮定した上でのことだが…）ので、ハルヒと朝比奈さんと長門の紹介を簡単にしてから電話を切った。
古泉には既に会っている筈だし、面倒なので奴の紹介は省略した。

相良の言った通り、朝は千鳥さんになんとか合流して学校に着く事が出来た。
来る途中に千鳥さんに、
「やっぱ昨夜から変よ？大丈夫？」などと言われたが、取り合えず大丈夫と言っておいた。

学校に着いた段階で既に2～3驚いた事があったので目に入った順に紹介しよう。

まず一つめ。

明らかに何かで掘った後では無いと分かる穴が校庭の隅に開いており、穴の周りに
「キケン！立ち入り禁止」の看板が立っていた。

ありゃ一体なんだ…？

二つめ。

校舎内のあちこちに小さな穴があいていて、その穴から放射状のヒビがはえている。
これに似たヒビを映画で見た事があるな。
確かあの映画では拳銃の弾が当たった痕だった気がする。
…まさかこれも？
んなアホな。

三つめ。

教室が、二年の教室だった。
言っておくが、俺はまだ一年だぞ。
二年生の授業についていける訳がない。
あんたは俺より年上だったのか相良。
そして許してくれ。
俺と入れ替っている間のお前の学力成績は著しく低下するだろう。

まあ見ただけで驚いた事はこんなとこか。
驚いた事を全て数えると俺の体についている全ての指を使っても到底足りないんだが、残りは大体、体験談になる。
それは話の流れの中でいくつか出て来る筈なので、それまで待って欲しい。

きーんこーんかーこーん…

1時限目の始まりを知らせるチャイムが鳴っている。
最初の授業は……英語か。
…俺は普段からあまり勉強はできる方では無いのだぞ？
2年の英語？
出来るわけ無いだろう。

授業が始まったが、俺にはサッパリ分からん。
……寝よう。

俺が机にうつ伏せになり睡眠という名の楽園まで行こうとしたとき、
「はい！次の例文A。訳せた人は誰もいないの？じゃあ相良くん？」
なぜこういうときに限って指されなければならないのか。
先生、俺を指名したって混乱をまねくだけですよ。
それに、なぜ誰も出来ない事を知っていて俺を指名するんですか。
これは一種のイジメですか？
まあそんな事を実際に言い出せる訳もなく、ここはわかりませんと言っておこう。
しかしそう言うと女性教師は腹を立てた様に叱りつけてきた。
「からかってるの、相良くん！？いつも海外の怪しい友達と、電話でペラペラ密談してるでしょ！？英語で！」

そんな事言われてもなぁ。

姿かたちは相良であっても、中身は違う訳で。
それに怪しい友達と英語で密談って、余計に俺の体が心配になるじゃないか。
今後の俺自身の身の安全も心配だ。

「あー、もういいです。教室の後ろに立ってなさい」

そんな昔の小学生やマンガじゃあるまいし。

「口答えは無し！いつも通り、黙って“休め”の姿勢で立ってなさい！」

俺は、ここではこんなレトロな風習があるのかと勝手に納得し、抗弁する事をやめて席を立った。
周りの生徒が何やらヒソヒソとこっちを向いて喋っているが、内容までは聞き取れなかった。

やれやれ、疲れる。

その後の授業は全て寝て過ごした。
我ながら情けないとは思うがな。
そして４時限目の前の休み時間に、俺は千鳥さんに廊下まで引っ張り出された。

「あの、何の用ですかね」

「…前にもこんな事があったわね。まぁ世の中には自分のソックリさんが三人いるっていうらしいけど…」

「…は？」

「率直に聞くけど、あんただれ？言っとくけど、ソースケじゃないのはもうバレてんだからね」

〜［北高］〜

涼宮ハルヒは普段と同じ時間帯に学校に来たが、１時限目が始まる時間になっても涼宮ハルヒの前の席に人が座ることは無かった。
それは２時限目が始まっても、３時限目が始まっても同じだった。

「もぉ〜！！何やってんのよバカキョンは！？」

授業中にも関わらず彼女は大声で叫んだ。
教師を含め周りの生徒達は、いきなり何を言い出すんだコイツは、
といった顔で彼女を凝視したが、当の本人はまったく気にしていない。

（団長に無許可で学校休むなんて重罪よ！来たら何してたのか問い詰めてやるんだから）

と、彼女は1人で意気込んでいた。
そして彼女の大声によってざわめきだした教室がある程度静まってきたとき、

ガラッ

教室にキョンが入ってきた。

「遅くなりました」

教師にそう言ったが、キョンはなかなか席に着こうとしない。
ドアを開けた体勢のまま教室内をぐるりと見渡し、再び廊下に顔を出し見渡す。
それを何度か繰り返した後、今度は涼宮ハルヒを数秒間凝視し、ようやく席に着いた。

「遅かったじゃない。何してたのよ」

彼女の問掛けにキョンは、

「地理の把握と武器の入手に手間取ったのだ。知らない地域でこれを入手するのは……いや、忘れてくれ」

「はあ？あんた何訳分かんない事言って―」

「じゃあこの問題を堂々と遅刻してきた奴に解いて貰おうかな」

そう言って話を遮ったのは授業担当の教師だ。
よくいるのだ。生徒が遅刻して入って来ると、早速その生徒に問題を出す教師が。
キョンは問題を出してきた教師に聞いた。

「自分が、でありますか」

「そう。この英文の訳を書いてください」

「了解しました」

キョンは黒板に向かうと、サラサラと解答して自分の席に戻った。
普段のキョンなら、頭を抱えながらなんとか解答して、それでも多々間違えがあるといったところなのだが、今日は一瞬で、しかも完璧に解いた。そしてその後も一切寝る事なく授業を受けていた。

…キョンの様子がおかしい。

彼女はそう直感した。休憩時間を知らせるチャイムと同時にキョンに話し掛けようとしたハルヒだったが、先にキョンの方から話し掛けてきた。

「次の授業はなんだ？」

「えっ、古典だけど…」

「古典か……。……しまった！」

何かを思い出した様に青ざめた顔のキョンは、廊下まで走って行った。

彼女はキョンが放っていた威容な威圧感で、自分の要件を言えなかった。

～（陣代高校）～

まるでハルヒの様に勘のいい人だな。

もうバレてしまったらしい。

それとも俺が少しマイペース過ぎたか？

そりゃ普段真面目に授業受けてる奴が全授業居眠りして過ごしてたら、ちょっとはおかしいと思って普通だろうが、それでも「どこか具合悪いのか？」と思うくらいじゃないか？

そもそも相良が普段どのように授業受けているかなんて知らんしな。とりあえず俺は千鳥さんになんで俺が相良ではないと思うのか聞いてみた。

「あいつはあたしに敬語使ったりしないのよ！それに、神楽坂先生に出された問題が出来なかった時点でピンときたわ。…経験って大事よね」

彼女は何かを思い出した様に苦笑していた。

「それから！ソースケはあんたみたいに堂々と居眠りはしないのよ！あいつは、ほんっと～に疲れたときにだけ、起きてる姿勢のまま、目を開けたままで寝るの！まぁ、あれはあれである意味堂々としてるけど…。あとはあたしの第６感よ！」

彼女は俺の胸を小突きながら言った。

しかしまぁ言葉使いや問題が出来なかったからってのはなんとなく理解出来るが、相良は目を開けたまま寝るだって？

たまにそういう特技を持っている人がいると聞いたこが、そんな死体じゃあるまいしなぁ。

そんな事を考えながら何と返答すれば良いか黙って考えていると、俺の携帯、いや相良の携帯に俺の携帯から、つまり相良からメール

が届いた。

なんだかややこしいな。

ちなみにメールの内容はこうだ。

＞千鳥に『借りていた古典のノートを基地に忘れてしまった』と伝えておいてくれ＜

借りていたノートを忘れて来るとはなんて奴だ。

とりあえず俺は千鳥さんにノートを忘れてきた事を伝えたんだが、

「…あっ、そう……。あいつは…こういう時に限って……」

千鳥さんはそう言って握り拳でうつ向いたままプルプル震えている。

俺はこの時生まれて初めて怒りのオーラというものを目にした…。

……様な気がした。

「そう。あたしは寛大だから、あと３０秒だけ待ってあげる」

３０秒待つのは寛大と言えるのだろうか。

「それでもあんたがソースケだって言うんだったら…」

指を鳴らしながら俺をおもいっきり睨んでいる。

どうやら狂暴モードに入っているらしい。

普段ハルヒに死刑だのなんだのと言われているが、この時はさすがに本当に殺されると思ったね。

結局俺はそのあまりの恐ろしさに耐えきれず話してしまった。

〜［北高］〜

千鳥はやはり怒っているだろうか・・・。

宗介はキョンの無事、と言うより、自分の体の無事を祈りながら教室に戻った。
すると、涼宮ハルヒがもの凄い形相で彼を見ていた。
睨むまでにはいたらないが、不信感たっぷりの顔だ。
宗介は、涼宮ハルヒには出来るだけ手を出さない（暴力をしない、危害を加えない）様、古泉から言われてはいたが、彼は紛争地帯で育った現役の傭兵であり、危険を感じればそれなりの対応をするのは当然である。
彼は常に動き出せ、いつでも腰に手をまわせる姿勢を保ちながら授業を受けた。

幸か不幸か、彼には問題が出される事も無く、授業は至ってスムーズに進んだ。

しかし、窓際後方の二席だけ異様な空気が漂っていた事は、言うまでも無い。

授業が終わり、昼休みのベルが鳴ると同時に、宗介は制服の襟を後ろから掴まれた。
涼宮ハルヒが掴みかかってきたのだ。

宗介としては、掴まれただけで不覚をとったと言わざるを得ないが、殺気が無かった分だけ反応が遅れたと言って良いだろう。
そして、よく知らない環境・状況・場所にいて、警戒心がかなり高ぶっている宗介が、いきなり制服を掴まれてやる事は一つだ。

宗介は、彼の制服を掴んでいる涼宮ハルヒの腕を掴んで、床に押し倒してしまった。

第４章～交換生活－その２－～

普段のキョンなら、彼女が制服を掴んでそのままずるずると引きずられて行くのがパターンなのだが、今日のキョンは彼女が反応出来ない程の速さで対応し、しかも反撃までしてきた。

「いっったあぁ！なぁにすんのよあんたは！」

「俺に何の様だ。所属する組織名、階級、任務内容を吐いて貰おう」

あまりの突然、かつ異様な出来事に、教室が静まりかえっている。しかし二人はお構い無しに続けた。

「早く放しなさい！！いい加減にしないとほんとに殺すわよ！！」

「質問に答えろ。俺に何の様だ」

「早く放しなさいって言ってるでしょ！！団長命令よ！！」

「下手な嘘はためにならんぞ。お前の様な奴が、組織を率いて行ける訳が無い」

こんな調子で数分ほど言い合っていると、

「遅かった様ですね」

人が集まってきた教室に、古泉がやって来た。

さすがの古泉もこの時ばかりは焦った顔をしていた。

「ちょっと古泉君！こいつになんか言ってやって！」

「わかりました」

そう言うと古泉はキョンの方に歩み寄り、

「ちょっと良いですか」

「何だ」

「実はですね…」

そう言うと、古泉はキョンの耳元で何やら話しているが、彼女には聞こえなかった。

ある程度話し終えると、キョンの顔はどんどん青ざめていき、彼女からはじかれた様に飛び退くと、直立不動の姿勢で彼女に言った。

「…も、申し訳ありません団長閣下。自分は今、非常に当惑する状況下にあり、把握していればこの様な狼藉は…」

「そんな事より！あんたホントにキョンなの！？誰なのよいったい！？」

「涼宮さん、ちょっと良いですか？貴方も」

「場所を変える必要なんてないわ。今ここで…ってちょっと古泉君聞いてるの！」

古泉は、キョンとハルヒを文芸部室まで少々強引に連れていった。

部室に着くと長門有希もいて、窓際に座って本を読んでいる。
しかし彼女は長門が居る事すら忘れてキョンに怒鳴り始めた。

「もう一回聞くけど、あんたホントにキョンなの？」

「……」

「答えなさいよ！」

「団長閣下。申し訳ありませんが、その質問にお答えすることは出来ません」

「いーから答えなさい！！」

「……」

まるで教師に叱られた小学生の様に黙りこむキョン。

その場に重い空気が流れる。

「僕が代わりにお答えましょう」

そう言ってその場の重い空気を打開したのは古泉一樹である。

古泉は彼女に向かってなぜか笑顔で話し始めた。

「先日、陣代高校の生徒とこれでもかというくらい、激しく衝突しましたよね？どうやらその時、中身が入れ替ってしまった様なんですよ。なんと言うべきでしょうか…。『魂』、とでも呼ぶべきものがね。今ここに居るのは、姿かたちはキョン君ですが、中の魂は彼ではありません。逆に、相良さん、あっ、今キョン君の中にいる彼の事ですが、今の彼は姿かたちは相良さんですが、中の魂はキョン君なんです」

「……それ、本当？」

ハルヒが疑惑の目で古泉を見る。

古泉はやはり笑顔で、

「今のところは仮定に過ぎませんが、恐らくあっていると思いますよ。実際に、僕は既にキョン君の魂が入った相良さんとも会いましたしね。涼宮さんに知らせなかったのは、あなたに心配かけたくないから知らせるなと、直々に言われましてね」

「な、なんであたしがバカキョンなんかに心配されなきゃならないのよ…」

ハルヒは赤面し、斜め下を向きながら何やらぶつぶつ言っていたが、すぐに正面に向き直り、

「でもあれよね！キョンばっか面白そうな事してずるいわよね！キョンが戻って来たら、ドッヂボールで永遠に外野の刑にしなくちゃだめね」

なんとか切り抜けた様で、宗介はとりあえず安心した。

しかし、出来るだけ正体を明かさないようにしてくれと古泉から言われていたので、その古泉が明かしてしまったのは宗介も少々驚いた。

理由はおおよそ想像ついていたが、確認のために後で聞いておいた方が良いだろう。

するといきなり涼宮ハルヒが、

「最近退屈だったから調度良いわ」

と言って部室の黒板に何やら書き出した。

そして書き終えると、

「いいみんな！？放課後はこれのミーティングをやるからね！あたしより遅れたら罰金よ！」

黒板を叩きながら言って部室を出て行った。

黒板には、

＞入れ替った魂を元に戻そう大作戦！！＜

と書いてあった。

～（千鳥かなめ宅）～

あまりの恐怖に耐えかね事の詳細を千鳥さんに話したんだか、『宇宙的電波のせいで入れ替ってしまった』なんて言っても信じて貰えないと思ったので、相良とぶつかった時に入れ替った事にして説明した。

俺は熱心に釈明したのだがそれでもなかなか信じて貰えなかったので、実際に相良に電話する事になった。

そういう事で今は放課後、千鳥さんの家である。

「さあ、本当に入れ替わったってんなら、ホントーのソースケと連絡とってもらえる？電話で」

俺は千鳥さんに言われるがままに携帯を手に取り番号をおした。

彼女が怒ると非常に恐い事は既に身をもって体験してしまったしな。

相良がちゃんと俺として活動しているのであればだが、この時間帯ならＳＯＳ団のアジトで朝比奈さんの煎れてくれたお茶を飲みながら古泉とオセロでもして、我らが団長涼宮ハルヒ殿のご到着を待っている筈だ。

おそらく、今ほど朝比奈さんの煎れてくれたお茶を飲む自分の体を忌々しく思う事は、後にも先にも無いだろう。

いや、とにかく電話をかけなくては。

頼むから出てくれよ。

すると意外と言うか予想通りと言うか、呼び出しコールが僅か2回程で相良がでた。

～［北高文芸部部室］～

団長である涼宮ハルヒより遅れると罰則があると聞かされた宗介は、放課後になるとすぐさま文芸部部室まで向かった。そこには既に長門有希と朝比奈みくるが居た。
宗介は長門有希には先程会ってはいたものの、キョンに聞いた人相と照合する余裕がなかったため、ここで改めて確認した。
窓際で無表情に本を読む小柄な女がおそらく長門有希だろう。
そして特殊な制服（宗介にはメイド服がそう見えたらしい）を来て茶を煎れている長髪の女が朝比奈みくるか。

「あっ、キョンくんと古泉くん。今お茶煎れてますからもうちょっと待ってて」

宗介の後ろには一樹も入って来ていた。

「あの、ところでこれなんですか？魂って？」

朝比奈みくるが不思議そうに黒板の方を見ながら言った。

「それなら、涼宮さんが来れば全て分かりますよ」

一樹が簡潔に答える。
朝比奈みくるは、疑惑が残ってしっくりこないといった表情を浮かべながら、お茶を煎れる作業に戻っていった。

その時、キョンの携帯が鳴った。
発信者番号は宗介の携帯だ。
彼はすぐに電話にでた。

「はい」

『あっ、相良か。俺だ』

「なんの用だ」

『実は千鳥さんにバレちまってな……。それで、千鳥さんがお前と電話したいみたいで。ちょっと待てよ』

宗介声のキョンがそう言って千鳥と変わった。

『ちょっと！あんたほんとにソースケなの！？』

「む、千鳥か…。その…肯定だ。非常に…、その、信じ難い事なのだが…、どうやら俺は、キョンと入れ替わってしまった用だ…」

『キョン？』

「この男のコールサインだ。ここではそう呼ばれているらしい」

『あっそう。そっちは大丈夫なの？』

「問題ない…とは言い難い状況ではあるが、大丈夫だ」

『あとそれから！あたしのノート基地に忘れてきたってどういう事

よ！？』

「そっ、それは…。すまん千鳥。今日一旦基地に戻る予定だったうえ、あの宿題の提出期限は次の火曜だったろう。こんな事になるとは俺でも予想外で…」

『まあいいわ。今回だけは特別に許したげる』

「許してくれるのか？」

『今回はしょうがないよ。その代わり、早く元に戻りなさいよ！』

「了解した」

ちなみに千鳥と宗介の会話は全て英語である。

後に千鳥は

「やっぱ『体が入れ替わった』なんてなかなか信じらんないでしょ？だからちょっと試したのよ」と語る。

当番だった教室掃除を済ませた涼宮ハルヒは、部室にむかいながら考えていた。

勢いよくぶつかって入れ替わったんなら、またぶつかれば戻るのかしら…。

キョンがいないとつまんないじゃない。

バカキョンのバカ。絶対元に戻してやるんだから。

そんな事を考えながら、彼女は部室の前までついた。

すると中から、流暢な英語を話すキョンの声が聞こえた。

彼女は気になり、勢いよくドアを開けた。

ドカッ！

「みんな！集まってる！？」

あくまでいつも通り振る舞う。

習慣とか気分とか、そういうものではなく、彼女の中の何かモヤモヤした感じが、自然とそうさせた。

そこにはやはり、流暢な英語で電話をするキョンの姿があった。

やっぱりこれはあたしの知ってるキョンじゃないんだ…。

彼女は改めてそう思った。
彼はまだ、彼女が部室に入ってきた事に気付いていない様子で電話を続けていた。
彼女は古泉にたずねた。
「ねぇ古泉くん。あいつ誰と電話してんの？外人？」
「いえ、日本人の筈ですよ。先程、キョン君から電話がありましてね。相良さんのガールフレンドが彼と話したいと」
それを聞いた彼女は、脊髄反射的速度で、
「えっ！？キョンから電話があったの！？」
「ええ。あの電話が、相良さんの携帯からかかってきたと言う事なので、今頼めばかわってくれると思いますよ」
そう聞いては黙っていられないのが涼宮ハルヒの涼宮ハルヒたる由縁である。
彼女の後ろで、事の詳細をまだ知らないみくるが
「キョンくん、いつの間にあんなに英語上手になったんですかぁ？」
とか
「キョンくんから電話って、キョンくんここにいるじゃないですか」
とか言っていたが、今の彼女はみくるにかまっている余裕は無かった。
彼女は宗介の横に行くと、

「ちょっとあんた！」

「団長閣下！これはとんだご無礼を…」

「いいの。それより、電話かわって」

「はっ、どうぞ」

そう言いながら、彼は電話を差し出した。

彼女はそれを手に取り、話し始めた。

「キョンと換わんなさい」

『……あんた、誰？』

「いいから換わんなさい！」

『はあ？あんた何様のつもりよ！？』

「換わんなさいって言ってるでしょ！」

『もうちょっと礼儀ってモンがあるでしょ！礼儀ってモンが！ったく…』

～（千鳥かなめ宅）～

なにやら言い争いをしていた千鳥さんは
「何よこいつ、図々しいわね」などと言いながら俺に携帯を返却した。
まだ切れていないようなので俺は取り合えず出てみたんだが、

「もしもし？」

『こらバカキョン！！あんた今どこで何やってんのよ！？』

む、この声はまさか…

「お前、ハルヒか？」

『当たり前でしょ！！あんた、団長であるあたしに無断で体交換なんて楽しそうな事して！』

なるほど。
千鳥さんが図々しいって言ってたのはハルヒの事だったのか。
同感ですが、我慢してください。
なんなら俺が代わりに誤りますよ。
スイマセン、図々しい団長様で。
それにハルヒ。そんなに楽しそうだと思うなら出来れば代ってくれ。

俺は今すぐにでも元の体に戻りたい。
しかしなんだ。まだ体が替わって2日と経っていないのにやけにハルヒの声が懐かしく聴こえる。

「何だお前、俺と相良が入れ替わっちまったの知ってんのか？」

『あいつがあんだけ変な態度とってたら誰だっておかしいと思うわよ！』

一体どんな態度とってたのか気になるね。

まあ知りたいとは思わんが。

『いい！待ってなさいよ！あたしが絶対元に戻してやるんだから！あんたに心配される事なんて無いんだからね！？』

お前に言われると心強いよ。いろいろとな。

「解ったよ。頼りにしてるぜ。団長様」

『ん、まぁ解れば良いのよ…』

俺はハルヒが少々照れながら携帯で電話している図をなんとなく想像した。

なんとなくだがな。

俺は相良と少々話したい事があったので換わって貰おうと思ったその時である。

ぴんぽ～ん

千鳥さん宅のチャイムが鳴った。

「のわっ！」

ぶつっ、つー、つー、つー

予想外のタイミングで鳴り出したチャイムにビビった俺は変な声をあげて携帯をきっちまった。

まだ聞きたい事があったが、それはまあハルヒがいるのでは聞けない事もあるし、また後で電話しよう。

「はいはい。どちらさま～？」

ガチャッ

その来客は俺にとってかなり厄介かつ混乱を招き、話をややこしくする来客になる。千鳥さんにとっても少々予想外の来客だった様だ。まあ相良は知っていた様だが、それならなぜ教えてくれなかったのだ。

俺にだって心の準備期間くらいは欲しいぜ。

あったとしても何も出来んだろうが…。

一体いつになったら元の体に戻れるのかね。

やれやれ、疲れる。

本当に。

〜［北高文芸部部室］〜

「なによキョン。いきなり変な声あげて電話きっちゃって…」

彼女は携帯を見つめながら、不満と不思議、そしてキョンの安全を確認した安心感が入り混じった表情で言った。

そしてキョン姿の宗介に携帯を返して、

「まあいいわ。ところであんた」

彼女は直立不動の姿勢を保っているキョン姿の宗介を指さながら言

った。

「名前は？」

「はっ！相良宗介軍曹であります！」

「ふ～ん」

彼女は素っ気なく応える。

一応聞いてはみたが、名前などに興味は無いと言った様子だ。

「ではこれより！第一回『入れ替わった魂を元に戻そう大作戦』ミーティングを開始します！」

彼女は＞団長＜と書かれた三角錐と、コンピ研から奪取したパソコンののった机の上に乗り、腰に腕を当て堂々と宣言した。

しかしその大作戦に1人だけ、疑問符を浮かべる少女がいた。

朝比奈みくるだ。

「あのぉ～、涼宮さん。この『入れ替わった魂』ってなんですかぁ？」

「みくるちゃんにしては良い質問だわ。古泉君、説明して」

古泉は、涼宮ハルヒに説明した時と全く同じ様に朝比奈みくるに説明した。

「えぇえぇ〜〜〜〜っ！！ほほ、ホントですかぁ〜！？」

「ええ、残念ながら」

古泉がそう言うと、彼女はいそいでキョン姿の宗介の方を向いて、お辞儀をしながら自己紹介を始めてしまった。

「ああの、朝比奈みくるです。よろしくお願いします」

「相良宗介だ」

宗介が簡潔に答えると、いつの間にか机から降りて椅子に座っていた涼宮ハルヒが意見した。

「でもさぁ、凄い勢いでぶつかってこうなったんでしょ？だったら―」

その会議は、軽く2時間を超えたという。

しかし、名案が出る事も無く、その日は解散となった。

第5章～襲来？～（前書き）

いよいよあの娘が！彼らが出てきます！！

第５章～襲来？～

～［事件二日前・西太平洋］～

東京から二千数百ｋｍの南。日本の最果て、硫黄島や沖ノ鳥島さえ、数百ｋｍの彼方である。

北緯２０度５０分、東経１４０度３１分にあるこの島は、一般の地図には載っていない。

関係者はこの島を『メリダ島』と呼んでいる。

メリダ島。

上空から見れば、そこはただの無人島だ。

だが地下は違った。

様々な最新装備や武器弾薬の備蓄、戦闘員の日常訓練。

そして超ハイテクの強襲揚陸潜水艦＞トゥアハー・デ・ダナン＜の整備基地。

そういった施設が、このメリダ島には建設されている。

そこは相良宗介の所属する極秘の傭兵部隊＞ミスリル＜の西太平洋戦隊基地なのである。

そこでは、自ら再設計に携った強襲揚陸潜水艦＞トゥアハー・デ・

ダナン＜の艦長を務め、この部隊の戦隊長でもあるテレサ・テスタロッサ大佐（愛称：テッサ）が、もうすぐ雑務に一段落つく頃だった。

テッサはアメリカ東海岸出身で、小柄でアッシュブロンドの髪と大きな瞳が魅力的な１６歳の美少女である。

週末には相良さんが戻って来るし、それまでに仕事を何とか片付けて、この前の分を挽回しないと！

そう意気込んでいると、卓上のインタフォンが鳴った。隣の部屋の秘書官からだ。

「はい？」

『大佐殿。カリーニン少佐がお見えです』

「通して下さい」

一体何の用だろう。

今日カリーニンと話しておかなければならない事は、もう無い筈だ。

何か緊急な事でもあったのだろうか。

「失礼します」

カリーニンが入ってきた。

アンドレイ・Ｓ・カリーニンは、灰色の長髪とあごひげが特徴の、大柄で歳は４０過ぎのロシア人である。

彼はまっすぐ彼女の執務机の前まで歩いて来て、ぴしりと敬礼し、彼女が答礼すると、彼はすぐさま右手を降ろして『気を付け』の姿勢をとった。左手には、なにやら書類を抱えている。

「どうしました？少佐」

「情報部から、新たな＞ウィスパード＜候補者が見つかった、との情報が入りました」

「＞ウィスパード＜が？」

「はい。これがその報告書です。写真は３年程前のものになります」

そう言いながら書類を渡した。

テッサはそれを見てある点に驚いた。

「＞ウィスパード＜該当率５０％？」

普通、『＞ウィスパード＜該当率』というのは７０％以上か３０％未満で出るもので、その間に入ることはかなり珍しい。

その上、ぴったり５０％となると、過去に例が無いかも知れない。

少々驚いた様子の彼女に、カリーニンはこう付け足した。

「内容が曖昧だったため情報部に確認したところ、この少女になにかあるのは間違いないが、＞ウィスパード＜かどうかは判断しかねるため、大佐殿に直接ご確認頂きたいとの事です」

なるほど。

おそらくコンピュータでも解らなかったから、＞ミスリル＜内で唯一の＞ウィスパード＜である私に直接行って診てきて欲しい、といったところだろうか。

「分かりました。出発はいつになります？」

「出発は遅くても土曜日になります。日本への滞在期間はおよそ一週間を予定してあります。大佐殿の護衛として、メリッサ・マオ曹長とクルツ・ウェーバー軍曹が同行し、もしその少女が＞ウィスパード＜だと判断された場合、ウェーバー軍曹がそのまま残り、情報部のエージェントが常駐する準備が整うまでのあいだ、少女の護衛にあたります」

「分かりました。しばらくは艦の作戦行動も無い予定ですし、出発は三日後の金曜日にしましょう。わたしの仕事も、それまでにはある程度終わるでしょうし」

「了解しました。では、失礼します」

そう言ってカリーニンは部屋を後にした。

カリーニンが行った後で、テッサはあらためて書類に目を通して、特に深い意味もなく呟いた。

「『スズミヤ・ハルヒ』さんですか。一体どんな人なのかしら…」

～［ＳＯＳ団・帰宅途中］～

会議を終えたＳＯＳ団の面々は、いつものように坂道を下りながら下校していた。

会議では、現状の確認をしたあと、涼宮ハルヒが今後どうしたら元に戻るか意見を求めたが、誰からも案は出ず、明日の０９００時に駅前の喫茶店で再び会議をするので、それまでに各自考えておくようにという事で解散になった。

ちなみに涼宮ハルヒは『もう一度ぶつかれば戻るんじゃない？』と言ったが、古泉一樹が『それは既に実験済みです。これ以上やると生命に関わりますので、辞めておいた方が良いかと』と言って却下になった。

女性団員と数ｍ距離をおいて歩いていた古泉一樹に、隣を歩いていたキョン姿の宗介は話しかけた。

「団長殿には、俺が入れ替わった事は黙っておくのではなかったのか？」

「あそこまで疑われたのでは、黙っておくと逆に閉鎖空間の拡大を悪化させるだけでしたので、第２プランを発動させて頂きました」

「第2プラン？」

「ええ。あまりにも貴方が疑われ、閉鎖空間が著しく拡大を始めたので、むしろ涼宮さんに入れ替わった事を話してしまい、同時に、キョン君の安全を理解して頂く事で、閉鎖空間の著しい拡大を抑えようと。現に、閉鎖空間は現在停滞傾向にあります。あくまで停滞ですので、現在発生している閉鎖空間を消滅させる為には、やはり貴方に元に戻って頂く必要がありますね」

「では何故ぶつかった事が原因と話した。上官への状況報告は正確に行うべきだ」

「まさか涼宮さんに本当の事を言う訳にもいきませんしね。適度なところで嘘情報が必要になります」

「もう既に、もう一度ぶつかってみたとか言うのもそれか」

「そういう事です。解って頂ければ幸いです」

それを聞いた宗介は、キョン宅まで無言で帰還した。

翌土曜日から月曜日までは三連休となっており、連休中はいろいろと騒がしい出来事があったのだが―

それはまた別の話である。

～（相良宗介宅）～

何なのだこの人たちは…。

今この場には俺を含めて五人居る訳なんだが、まあ一人は大体想像つくだろう。

千鳥かなめさんである。

だが残りの三人は相良の怪しいお友達で、美女、美少女、美男子と、見た目的には決して怪しくは無いのだが、話の内容が非常に相良に近い物があり、日本人ですら無いときた。

ずいぶんと流暢な日本語をお使いになられる方々だが、その話の内容というのはなんだか専門的な言葉が多く、俺にはほとんど理解出来なかった。

少々唐突過ぎたか。

では読者諸君のために俺の知る限りの範囲で説明しよう。

そうして気を紛らしておきたいのだ。

今から約六時間程前、そう、千鳥さん宅でハルヒと電話をしていて不意にチャイムが鳴ったあの時まで遡る。

……
……
……
……
……

〜（約六時間前・千鳥かなめ宅）〜

不意にチャイムが鳴り驚いて電話を切ってしまった俺は、通じてもいない携帯をただただ見つめていた。

くそっ。一体誰なんだ。

こんなバットタイミングでチャイムを鳴らす様な奴は。

「はいはい。どちらさま〜？」

そう言って玄関を開けた千鳥さんは驚いた様な声を上げて、

「て、テッサ！？それにマオさんも！？」

「やっ！カナメ、元気してた？」

「お久しぶりです」

俺のいる位置からではその来客の姿は見えないが、集金や郵便ではない様なのは間違いなく、千鳥さんはその来客を知っている様で、その来客に少々驚いている様だ。

千鳥さんは俺から見えないところ（まぁ玄関なんだか…）で来客とそのまま話を続けた。

「どうしたの？何で二人がこんなところにいんのよ？」

「あれ？彼から何も聞いてませんか？」

「別に、なにも聞いて無いけど…」

「任務よ」

「任務？」

「新たな＞ウィスパード＜候補者が見つかったんですが、確認の為にわたしがその人と直接会って来るんです」

「そういう事。で、あたしとクルツはテッサの護衛」

「えっ！？クルツくんも来てるの？」

「そうよ。でもあのバカ、こっちに着くなり『ちょっくら出かけて来るわ』とか言ってどっか行っちゃったのよ。まぁ今日は休暇みたいなもんだから、構わないんだけど」

一体何の話をしているのやら。
声から察するに来客が二人共女性らしい。

人間の好奇心という物は恐ろしい物で、こういうここからは見えないがすぐそこで何やら会話をかわしているという状況になると、非常に気になるものである。
かくれんぼで隠れている側が鬼の居場所を把握したくて顔を出したくなる、俺は今まさにそれと類似する心境だ。

そしてどんな人が来てるのか気になった俺は、そぉっと覗こうと思った時、来客の一人がこう言い放った。

「―それでね。セーフハウスに着いたらソースケが居ないのよ。こっちに来てるの？」

それを聞いた俺は急いで部屋の奥まで逃げ込んだ。
『ソースケ』ってのは多分今の俺の事を指している。という事は相良の怪しいお友達か。

今この状態で会うのはまずいな。
いつボロを出すか分からんし、いきなり来られたもんだから心の準備も出来てない。

というより、出来れば会わない方が良いのか……。

千鳥さんもその辺を察してくれたのか、

「えっ、い、居ないわよ！ウン！いないいない！」

ありがとうございます千鳥さん！

でも反応が怪しすぎますよ！

「ホントにぃ～？怪しいわね～」

やっぱり怪しまれてるし！！

「あ、あいつはぁ、ん～、まだ学校なんじゃない？何かほら、えぇっと、生徒会の用事が在るとか何とか言ってたし。う、うははは」

千鳥さん。

うろたえすぎですよ…。もう少し落ち着きましょう…。

などと声を掛ける事も出来ないので、心の声で叫びながらバレないように部屋の奥で隠れて祈る俺である。

「そうですか…。まぁ今回の作戦には、相良さんは参加しない予定ですので…」

「えっ、そうなの？」

「ええ。＞ウィスパード＜候補者に会って来るだけですから、危険な事は無いと思います」

危険な事って、一体この客はどんな仕事をしてるんだ？

「ふ～ん。んで、テッサはいつまでコッチにいるの？」

「日本に居るのは一週間くらいの予定ですが、例の少女が住んでるのがここからは少々距離があるので、月曜日には移動しますよ」

そんな調子で五分くらい続けていた千鳥さんは、『また後でそっち行くから』とか言って話を適当なところで打ち切った。

どうやら来客は帰った様だ。

やれやれ…。

などと気を抜いていると物凄い勢いで千鳥さんが俺の方に走って来て、かなり焦った様子で話し始めた。

「いい！？キョン君、よく聞きなさい！」

「千鳥さん。それはあだ名―」

「いいから聞きなさい！今からソースケがどういう人間なのか簡単に説明するから！！」

千鳥さんの話が少々長く、かつ変な専門用語が多数出てきて俺には分かりにくかったので、簡単にまとめるとこういう事らしい。

相良宗介という人間は実は秘密組織の傭兵で、今は千鳥さんの護衛の為に学校に通っている。
階級は軍曹らしい。

分かりやすいだろ？
非常に信じ難いがな。
ついでに言うと今の来客は相良の上官らしい。

……アホか。

俺が言うのもあれかも知れんが、誰がこんなＳＦめいた話を信じると言うのか。

たしかに今の俺の状態も充分ＳＦめいているし、俺がいつも通っている部室もＳＦめいた魔窟と化しているらしいので、そういう物には慣れたつもりだったのだが…。

さすがにここまで来ると、というか、こういうミリタリーなあれは専門外だ。

だがまぁ、ここはとりあえず信じておいた方が賢明だろう。

その後、千鳥さんに『相良宗介講座』を5時間程受けさせられてから相良宅にむかった。

…たっ、

……助けてくれ…。

～（回想終了・相良宅）～

……

……

……

……

……

で、今にいたる。
ちなみに相良宅に着いた時既に美男子さんもいて、俺は改めて千鳥さんに紹介してもらった。

ベリーショートの髪のナイスバディの大人のお姉さんが『メリッサ・マオ』さん。
階級は曹長らしく、要するに相良より一つ上官らしい。

小柄で幼さがのこる体をしていて、アッシュブロンドの長い髪をみつあみにしているのが『テレサ・テスタロッサ』さん。千鳥さんは『テッサ』と呼んでいたな。
階級は大佐で相良と比べると天と地程の差があるらしく、我がSOS団に例えるならばおそらく団長であるハルヒと平の団員に過ぎない俺程の差があるのであろう。

そんで金髪碧眼の美男子さんが『クルツ・ウェーバー』さん。

階級は軍曹と聞いた。つまり、相良と同じ地位ってこった。

しかし俺はこの三人の姿を見て、特にテスタロッサさんの姿を見て疑問に思った事がある。

俺の知識が正しければ大佐は確かこの中では一番偉いはずだ。

なのになぜこんな少女が大佐なのだ？

しかもなんだかみんな上官に対する態度ではないぞ。

いや、俺はその方面に詳しい訳ではなく、只のイメージで言っているだけなのだが…。

まあそういう訳だ。

なにがそういう訳だか自分で言っておきながら俺も良く解らず、なんだか無理矢理まとめた感まるだしだが、彼女らがこちらに居る月曜日まで、いろいろと騒がしい事が多々ありながらも、千鳥さんの協力のおかげで幸いにもバレる事は無かった。

…と思う。

さすがに怪しまれたりはしたがな。

この三連休中の出来事は、そのうち、俺の気がむいたら話してやろう。

第5章～襲来？～（後書き）

ちなみにまだまだ序盤です

第6章～戦隊長の特殊任務～

～［北高・1年5組教室］～

校内には、既に留学生到来の噂が流れていた。
その情報をいち早くつかんだのは涼宮ハルヒである。

「グンソー、聞きなさい！！今日ウチのクラスに留学生と教育実習生が来るらしいわよ！」

キョン姿の宗介が『相良宗介軍曹』と名乗ってから、涼宮ハルヒは彼を『グンソー』と呼ぶ様になっていた。
反対に、宗介はバレてからと言うもの、彼女の事を『団長殿』又は『団長閣下』と呼ぶ様になっていた。

「りゅ、留学生でありますか…」

宗介は留学生に良い思い出が無い。
かつて、彼の所属する組織の直属の上官である、テレサ・テスタロッサ大佐が陣代高校にやって来て、大変な思いをしたからだ。

「…団長閣下。その留学生と言うのはアメリカ人でありますか？」

宗介の妙な質問に、彼女は怪訝顔をした。

「さぁ？職員室の前でたまたま話立ち聞きしただけだから分かんないわ。でも、何で？」

「…いえ、何でもありません。恐らく気のせいです」

そう自分に言い聞かせるように、キョン姿の宗介は前に向き直った。

しかし、1年5組の担任である岡部教諭が教室に入ってくると、彼の予感は現実の物となる。

ガラッ

と、教室のドアを開けて入たのは、このクラスの担任である岡部教諭だ。

「おし、みんな席につけ。今朝は話す事が多いからちゃんと聞けよ」

岡部教諭は更に続けた。

「まずは…。今日から一週間、教育実習生がウチのクラスに就く事になった。悔しいがなかなかの美形だぞ。それから、同じく一週間、アメリカから留学生を迎える事になった。お前らと同い年だが、大学に飛び級で合格したんだそうだ」

これは…。

やはり…。

宗介は岡部教諭の話を聞いた時点で、半ば確信していた。

「じゃあ二人とも、入って自己紹介の方を」

言われて入って来た留学生は、やはり宗介の予想通りだった。

「テレサ・テスタロッサです。テッサと呼んで下さいね」

テッサの姿を見てキョン姿の宗介は、『やはりそうか…』と頭を抱えてしまった。

だがそのおまけにもう1人、見知った人物が教室に入ってきた。

「教育実習生のクルツ・ウェーバーです。女子のみんなは親しみを込めて『クルツくん』って呼んで下さいね！」

宗介は更に頭を抱えながらこう思ったと言う。

Ｗｈｙ？なぜ？
なぜクルツまで？

自己紹介した二人に対して各々の反応をする生徒たちの中で、最も特異な反応をしていたのが、キョン姿の宗介である。
彼は厳しい表情で、窓の外や廊下などに神経を配りまくっていた。

更に彼にこんな疑問が浮かんだ。

なぜマオではなく、クルツなのだ？と。

ある程度生徒からの質問に答えた後、テッサは岡部教諭に言われて、涼宮ハルヒの席の隣、キョンの席の右後方の席に座った。
先に話しかけたのは、意外にもテッサの方だった。

「あの、もしかして涼宮ハルヒさん？」

「えっ？まぁそうだけど…。何であたしの事知ってるの？」

「ＳＯＳ団…でしたっけ？それのホームページを見たんです。団長さんなんですよね？」

そう言われてはおとなしくしてられないのが、やはり、涼宮ハルヒの涼宮ハルヒたる由縁である。

「ホント！？ほら見なさい！やっぱりホームページ造って正解だったのよ！ねぇキョ…っあ」

そのホームページを造った張本人であるキョンに振り向き様に言おうとしたが、姿かたちはキョンであっても中身がキョンでない事をすぐに思い出し、彼女はテッサの方に向き直った。

「もしかして、そちらがキョンくんですか？」

「あっ、えぇ、そうよ！我がＳＯＳ団の一番下っぱの雑用係」

キョン姿の宗介は初めてキョンの地位を認識したようで、『そ、そうだったのですか…』などと言っていたが、彼女は構わず続けた。

「テッサ。あなたなかなか見所があるわ。よって！あなたを『ＳＯＳ団アメリカ支部』の部長に任命します！！」

この場にキョンが居れば、『本人に迷惑だろ』等と言って止めに入ったかもしれないが、生憎この場にはキョン姿の宗介しか居ないので、涼宮ハルヒを止める人間はいない。

ところがテッサは迷惑がるどころか、

「わぁ！ホントですか？ありがとうございます！」

と、嬉しそうに受け入れた。

何度も繰り返す様だが、この場にキョンが居れば、『止めておいた方がいいですよ』等と言って、テッサに忠告の一つでもしたのだろうが、生憎この場にはキョン姿の宗介しか居ないので、忠告する人間もいない。

「よろしくお願いします。涼宮さん」

「団長と呼びなさい！アメリカ支部部長！！」

「ハイ！団長！！」

テッサはそう言って、涼宮ハルヒと固い握手を交わした。

～［昼休み・屋上］～

「ウルズ6よりウルズ2へ。姐さん聴こえるかい？」

『こちらウルズ2。ちゃんと聴こえるわ』

「テッサは朝早々にハルヒちゃんとの接触に成功したぜ」

『朝って、クルツ！あんたもう昼よ！そうゆう報告はもっと早くしなさい！！』

「ね、姐さん。教育実習生って結構忙しいんだぜ？文句あんなら代わってくれよ」

『我慢しなさい。あんたには良い経験よ』

「けっ、何が良い経験だよ。めんどくせぇだけだっつーの。まぁ、日本の女子高生と触れ合えるってのは、確かに良いけどな」

今、クルツが居るのは学校の屋上である。

偽装とはいえ、教育実習生という身分の為か、上官であるメリッサ・マオへの報告が昼休みまで延びてしまったのだ。

ちなみに、＞ウルズ２＜はメリッサ・マオの、＞ウルズ６＜はクルツ・ウェーバーの、それぞれのコールサインである。

テッサも地上での作戦時のみ＞アンスズ＜というコールサインがつく。

涼宮ハルヒにも、この作戦期間中は＞ゴッデス＜というコールサインを付けられていた。
意味は＞女神＜である。

『それで？テッサは何て言ってた？』

「まだ判断しかねるからもう少し時間が欲しいってよ」

『そう。やっぱりさすがのテッサでも、会ってすぐには分かんないもんなのね…』

考え込んだ様な声を無線越しに出すマオにクルツは、

「ところで姐さん。今どこにいるんだ？」

『今？予定通りよ。ＥＣＳかけたＭ９の中であんたら出てくんの待ってるわ。ほんっと、ダルいったらないわ』

「なぁ、もしハルヒちゃんがその＞ウィスパード＜とかってやつで無かったらどーすんだ？」

『そうなったらそのまま撤収よ。たぶんね。ただの良い思い出作りで終わるわ。まあどうするか最終的に決めるのはテッサだけどね』

「ふーん…」

きーんこーんかーんこーん…

「やっべ、予鈴だ！急がねぇと！」

『クルツ！護衛対象に手ぇ出すんじゃないよ！』

「解ってるって！交信終了！！」

彼は通信を切ると、急いで階段を降りて言った。

その後、放課後までテッサとハルヒはなかなか仲良く過ごした。

クルツは、授業中は教室の後ろでしっかり教育実習生をしていて、休み時間になると女子生徒に質問の嵐をくらっていた。

一方キョン姿の宗介は、いつバレてしまうものかと冷や汗をたらしながら授業を受けていた。

〜［放課後・文芸部部室］〜

放課後になって、涼宮ハルヒはテッサを部室まで連れて行った。

涼宮ハルヒが『アメリカ支部の部長をやってもらうんだから、本部での経験も当然必要よね！！』と言って連れて来たのだ。

「どおテッサ！？ここが我がＳＯＳ団の部室よ！！」

「えっ？でも、ソコに文芸部って書いてありますよ？」

テッサは＞文芸部＜と書かれた表札を指しながら言った。

「気にしないの！ほら、入った入った！」

部室には既に、長門有希、朝比奈みくる、古泉一樹の三人が揃っていた。

「あっ、涼宮さん。お客さんですかぁ？」

「そちらは留学生の方ですね」

朝比奈みくると古泉一樹が口々に言った。

長門有希は全く気にする素振りも見せずに窓際の席で本を読んでいる。

「そうよ！ウチのクラスに来たアメリカからの留学生！」

「テレサ・テスタロッサです。テッサと呼んで下さい。よろしくお願いします」

「それでここにいるのが我がＳＯＳ団の団員。右から、みくるちゃんにユキに古泉君。みんな！仲良くしてね！」

「よろしくお願いしまぁす」

「・・・・よろしく」

「短い期間ですが、宜しくお願いします」

朝比奈みくる、長門有希、古泉一樹がそれぞれに応えた。

「早速だどテッサ。あなたには今我が団が直面している謎を解決する手伝いをしてもらうわ」

「…団長殿。それは出来れば止めておいて頂きたいのですが…」

今日初めてと言って良いほどに久しぶりに口を開いたキョン姿の宗介であるが、ハルヒだけではなく、テッサさえも彼の話を聞いていない。

「あの…、手伝いって何ですか？」

「フフフ…。それはね…」

涼宮ハルヒは黒板の前まで歩きながら不敵な笑いを浮かべた。

そして、前までつくと勢いよく『バンッ！』と黒板を叩いて、

「コレよ！！」

そこにはやはり、

＞入れ替わった魂を元に戻そう大作戦！！＜

と書いてあった。

「あの、入れ替わった…魂？…って何なんですか？」

「良い質問よテッサ。古泉君。説明してあげて」

ハルヒに言われた古泉は、涼宮ハルヒや朝比奈みくるにした説明と同じ説明をテッサにしてやった。

念のために、宗介の名前と学校名を伏せて説明したのだが、

「そんな事があるんですか？」

「まあつまりそうゆう事よ。そうよね？グンソー」

「グンソー？」

「こいつが自分でそう言ったのよ」

ハルヒがキョン姿のグンソーを指さしながら言う。

テッサは疑惑の目をキョンに向けて、

「…あの、あなたは本当はドコの方何ですか？」

テッサはキョン姿のグンソーに聞いたのだが、彼が反応するより先に涼宮ハルヒが返事をしてしまった。

「確か、…ジンダイって言ったっけ？東京都立の」

部室中に妙な空気が漂い始めた。

発生源は勿論、キョン姿のグンソーとテッサである。

「……あの、もし良ければあなたの名前を教えて頂けますか？」

非常に答えにくいテッサの質問に、再びハルヒが先に答えてしまった。

「あんた、名前なんてったっけ？確か、相良だったわよね？」

その言葉に対して、テッサは驚きを隠せない様で、

「えぇ～～～っ！！！ホントに相良さんなんですか！？」

「…っ、はい、…その、…まぁ、…肯定です」

「えっ？なに？テッサこいつの事知ってんの？」

そうハルヒに聞かれたテッサは、意外にも落ち着いた様子で、

「ええ。わたしの父であるリカルド・テスタロッサと、彼の養父であるアンドレイ・プレニーミンさんが古い友人なんです。なので、彼には幼い頃からよく遊んでもらってました」

テッサが陣代高校に留学した際に使ったカヴァーストーリー（でっち上げ話）を話し始めた。

「ふ～ん、そうなんだ。じゃあ余計にガンバんなきゃね！」

「はいっ！頑張りましょうね！相良さん！」

テッサはキョン姿の宗介にそう言った後、彼にだけ聞こえる様な声で、英語で囁いた。

『後でちゃんと説明してもらいますからね？』

彼女の顔が笑顔のままだっただけに、宗介は妙な恐怖感を覚えた。

〜（同日１２３０時・陣代高校）〜

この学校には売店も学食も存在しないらしい。

なので俺の昼飯は出張販売で来ているパン屋になる訳なのだが、俺がパン屋の元に着く頃には既に売れ残りのコッペパンしかなく、今日の俺の昼飯は味気無いコッペパンとなっている。

せめてジャムかバターがあればまだいくらかマシなんだが、さっきも言ったように売店が無いので、俺のそんなささやかな望みさえ叶いそうにない。

そして俺はその味気無いコッペパンを昼飯として教室で食していると、今までに聞いた事の無い様な放送が流れた。

『あー、テステス…。こちらは生徒会長である。千鳥生徒会副会長及び相良会長補佐官は、可急的速やかに生徒会室まで来られたし。これは会長命令である』

千鳥さんと相良、つまり俺を呼び出す放送らしいが、なんだこの軍隊みたいな呼び出しの仕方は。

俺はすぐそこでカスタードパンを食べていた千鳥さんに確認してみた。

「あの、千鳥さん。今の放送ってもしかして俺達の事呼び出してます？」

「もしかしなくてもそうよ。でも君が行くと面倒だからね。あたし一人で行くわ。あんたはここで待ってて」

いや、でも俺も呼び出されてるんだから、俺も行った方が良いと思うんですけどね…

「いいから待ってて。あたしがなんとかするから」
そう言って千鳥さんは教室を出て行ってしまった。

千鳥さん。
やっぱりあなたは優しい人だ。
ハルヒも普段からこれくらい気が利けばいいのにな。

そう言えば今頃あいつら何をしてるのだろう。
まぁ大体想像つくがな。
ハルヒは学食、朝比奈さんは教室で鶴屋さんと弁当、長門は部室で読書、そんなところだろう。
古泉は知らん。
味気無いコッペパンでも食ってるがいいさ。

などと考えていると、思ったより早く千鳥さんが戻って教室にきた。

随分早かったんですね。
俺なんかまだコッペパンを食い終わって無いですよ。

「先輩が、さっきあんたの事見かけてたらしくて、居ないって誤魔化せなかったのよ。どーしても来いって。先輩にしては珍しいわよねぇ」

あんな放送からして俺には既に珍しいのだが、それが珍しくなるという事は少しはまともになったという事だろうか。
まあそんな事はどうでもいい。
呼び出されたんだ。
出向いてやろうじゃないか。

確か生徒会室でしたよね？

「そうよ。でもあんたは黙って立っててくれればいいわ。ほら、行きましょ」

まぁそうゆう訳で生徒会室で待つ生徒会長の元に赴く事になった。
だが相良がいなければならない話って一体なんだ？
あいつが起こしたゴタゴタの事なら、俺は何も知らんからな。

「林水先輩、ソースケも連れて来ましたよ。話ってなんです？」

生徒会長の前に立った千鳥さんが生徒会長に言った。

この学校の男子生徒は黒の学ランが規定の筈だが、何故かこの会長の学ランは白く、右手に扇子を持っている。見た感じ身長は高め、髪はオールバックで眼鏡をかけている。

なんだかいかにもと言った感じの生徒会長だな。

「ご苦労、千鳥君」

『ご苦労、千鳥君』ときたか。

「さて、先日北高に行って貰った時の件だが、その際何か事故があった様だね。聞いた話によると、なんでも相良君が向こうの生徒と激しく衝突したとか」

俺は一瞬、体に緊張と言う名の電撃が走った。

「ええ、まぁ、そうですけど…」

「一応、校長と私から謝罪しておいたが、当人が謝罪しないのは良くない。それによって今後、我が生徒会の活動に支障をきたすかもしれん。明日で構わんので、二人で行ってきたまえ」

「要するに『謝ってこい』って事ですか？」

「そう言うことだ」

だったら最初からそう言えば良いものを…

「なん…いえ、分かりました」

千鳥さんが何かを言いかけたが、何故か俺の方を見て止めた。

「前と同じ時間で良いですかね」

「いや、学校が終わってから行きたまえ。先方が、その方が良いと言ってきているのでね。校門前にタクシーを停めて置くので、授業終了後、直ぐに向かうといい」

先方って誰だよ。

ハルヒも相良も古泉も事情知ってる訳だから、わざわざ謝罪の要求をしてくるような事は無い筈だ。じゃあ北高の生徒会長か？
しかしあの生徒会長も古泉の一派だから事情を知ってておかしくない。
となるとどちらかの学校の校長か？
それが一番あり得るな。それ以外では納得できん。

でも校長がわざわざ『当人に謝罪させろ』とか『当人に謝罪させたい』なんて言うもんなのか？
でもこの生徒会長なら『当人に謝罪させた方が良いでしょう』とか言ってそうな気がする。
今後の生徒会の活動がどうとか言ってるくらいだからな。

「分かりました。明日行ってきます」

千鳥さんがそう言って俺たちは生徒会室を後にした。

俺はこの時、あくまでも予感だが、もうすぐ元の体に戻れる様な…。

…そんな気がした。

…なんとなくな。

～［放課後・某市内セーフハウス］～

「―と、言う訳なのだが……」

キョン姿の宗介が今居るのは、涼宮ハルヒの観察・護衛の為に＞ミスリル＜が手配したセーフハウスである。
比較的、涼宮ハルヒの家の近くにあり、観察するにも護衛をするにも便利な場所である。

彼がなぜここにいるのかと言うと、テッサはもちろん、マオやクルツに、なぜこんな状況に陥ったのかを説明するためだ。

しかし彼女らは、体が入れ替わった経緯を事細かに説明したにもかかわらず、なかなか信じてくれない。

「そう言われてもなぁ…」

「なんか信じらんないわよねぇ」

クルツとマオが続け様に言う。
しかし、彼らの反応は至極まともな反応である。

いきなり『俺は体が入れ替わった』などと言われて、信じる人間などそうはいない。
現に宗介も、古泉に説明された時は、古泉を哀れに思った程だ。

「…そう思うのは当然だろう。俺も最初はそう思ったし、なかなか現状を把握することが出来なかった」

宗介がそう言うと、これまで沈黙を保っていたテッサが、彼に問いただした。

「解りました。仮にあなたが相良さんだとして、これからどうするつもりですか？」

「今、古泉一樹が所属する特殊機関が、自分とキョンを元に戻す方法を模索しています。…その方法が見つかり次第、なんとか…」

「では、まだ元に戻る方法は分からないんですね？」

「…はい。…その、残念ながら…」

「その『特殊機関』というのは？」

「…『機関』としか聞いていませんが、ＳＯＳ団の事ではないと思われます。…罠だとしても、自分には元に戻る方法が思い当たりませんし、その手助けをしてくれると言うなら、今は協力すべきと…判断しました…」

「彼らはなぜあなたの手助けを？」

「自分もよく…理解出来ていないのですが、…古泉一樹によると、涼宮ハルヒには、精神的に不安定になると…その、異常気象の様な物を発生させる力があり、…自分とキョンが入れ替わっていると…困るんだそうです」

彼の額は汗でびっしょりである。

これ以上彼に電波話をさせると、本当に頭が爆発するのではないか

といった様子だ。

聞いているテッサたちもそれを察した様で、

「…わかりました。詳しい話はまた後日にしましょう」

「…そうね。こんな判りやすい罠、敵がわざわざ仕掛ける筈も無いし」

宗介はとりあえずホッとした。

テレビでは特番を組んで、最近続いている凶悪事件のニュースを報道していた。

『先週木曜日から続いている連続少女暴行事件で、新たな被害者です。

被害者は東京都立陣代高校に通う二乃野鈴さん１５歳。

学校からの帰宅途中、泉川駅構内で背後から襲われたとの事ですが、幸いケガはありませんでした。

これまでの被害者も全員１６歳前後の高校生で、身長も１６５ｃｍ前後と身体的特徴が多い事から、警察は同一犯の犯行と見て調べをすすめていますが、駅の防犯カメラの映像に何も映っていなかった事から―』

しかし、音も小さい為か、聞いているのはクルツくらいだ。

テッサからの質問責めからなんとか一息ついた宗介は、今朝から抱いていた疑問をテッサに尋ねてみた。

「大佐殿。今回は何故わざわざ日本へ？それも、陣代高校ではなく、あの学校なのですか？」

「わたしは、涼宮さんが＞ウィスパード＜かどうか確かめに来たんですよ」

「団長殿が？」

「ええ。情報部からの要請がありまして」

実際には、直接的に正式な要請があった訳では無いが、テッサの他に確認出来る人間が＞ミスリル＜にいないので、必然的にそういう事になるのだ。

「でも、先程の話の事を考えると、彼女の能力というのは＞ウィスパード＜の事ではなさそうですね。まだ断定は出来ませんが…」

「じゃあ、このまま帰還するの？」

そうマオがテッサに尋ねると、

「いえ、もう少し様子を見ようと思います。まだ時間もありますし」

「そっ、じゃああたしらは引き続きテッサの護衛って事ね」

「はい。お願いします、メリッサ」

そんな会話を余所に、クルツは、

「へぇ～、日本も怖くなったねぇ」

などと、ニュースに対する感想を、一人述べていた。

～（１９００時・千鳥かなめ宅）～

夕食は、千鳥さんに戴く事になっている。
『どうせソースケんとこ、干し肉とかコッペパンとかカロリーメイトのフルーツ味とかしかないんでしょ？』
と、まるで相良宅の冷蔵庫の中身を把握しているかの様にいって、体が入れ替わっている間の夕食を作ってくれるという。

なんとありがたい申し出であろうか。
そしてその料理の旨い事美味い事。

と、いう訳で…
今は千鳥さんの家で、千鳥さんの料理をいただいている最中である。

メニューはというと、肉じゃがとかサンマの塩焼きとか、一見婆さんの夕飯ですか？と問いたくなる程の渋〜い和食なのだが、先程も言ったように、驚く程旨い。
正直言うと、ウチのお袋より旨いと思った。

「……あのさ、ソー…じゃなくて、キョンくんさぁ」

と、千鳥さんが突然話をかけてきた。その時――

「えぇっ、と…その……あ、あのね？――――」

ピリリリリッ！
ピリリリリッ！

相良の携帯が、まるでタイミングを見計らったかのように鳴り出した。
俺は一言千鳥さんに言ってから、携帯に出た。

「もしもし？」

『あっ、古泉です。キョンくんで、あってますよね？』

ああ、あってるよ。
わざわざ何の用だ？

『明日、こちらに来ますよね？』

こいつはストーカーか何かか？
何で俺の行動予定を事前に知っているんだよ。

『まぁ、その辺はご想像にお任せしますが…』

おいおい、そんな事言って、まさか本当にストーカー行為をしている訳じゃあるまいな。

……うげぇ、想像するだけで気色悪い。

「いいからさっさと要件を言え」

『そうですね。…貴方と相良さんを元に戻せる可能性が出てきたので、とりあえずご報告をと思いまして』

「本当かっ？」

『ええ。詳しくはこちらに着いてからお教えしますが、長門さんがその方法を見つけてくれました』

そうか…。

結局、また長門に頼る事になるのか。

『とりあえず明日、予定通り放課後にこちらに来て下さい。北高に着きましたら、真っ直ぐ部室に向かって構いませんので』

「ああ、わかった」

『では、また明日』

～［２１００時・某市内セーフハウス前］～

ある程度話し終えた宗介はキョンの家まで帰ろうと、セーフハウスの玄関を出た時である。

「話は終わりましたか？」

横に古泉一樹と長門有希が立っていた。

「何の用だ」

「おや、随分な言い様ですね。せっかく元の体に戻れる方法が分かったかも知れないと言うのに…」

「本当かっ！？」

「ええ、あくまで可能性の一つですが。彼女が見つけてくれました」

そう言って古泉は長門の方を向くと、長門は縦に首をふった。

「どうすれば元に戻れるんだ？」

「速報は御覧に？」

「連続暴行事件の事か」

「ええ。その犯人が、どうやら貴方とキョン君を入れ替えた情報生命体の仕業の様なのです。少女を連続で狙っているところからみると、狙いはどうやら涼宮さんの様ですね」

「その辺の事情は俺にはよくわからん。要するにどうすればいいのだ？」

そう彼が聞くと、今まで口閉ざしていた長門有希が、

「その事情生命体を消滅させる事により、貴方が元に戻れる可能性がある」

「その可能性は？」

「およそ３５％」

３５％か。

客観的に見て決して確実とは言えない数字だ。

しかし…

「まぁこのまま何もしないよりは、やってみる価値有りだよな」

「クルッ！！」

背後から話しに割って入ってきたのは、クルツ・ウェーバーだった。

「聞いていたのか…」

「タバコ買いに出てきたら、たまたまお前らが話してたんでな。悪いけど聞かせてもらったぜ」

「貴方は教育実習生のクルツさんですね。彼のお仲間だったんですか」

「まぁそうゆう事だ。ユキちゃ～ん。教育実習生のクルツ君ですよ。よろしく～」

等と、クルツは長門に手を降って挨拶した。
長門は特に反応しなかったが、クルツは気にせず話を続けた。

「よくわかんねぇけど、あの暴行犯をとっ捕まえればソースケは元に戻れるんだろ？協力するぜ。こんなバカげた事、俺はさっさと終わらせたいんでね」

「全く、同感よね」

「ホントですね」

「マオに大佐殿まで！！一体いつから…」

「ついさっきよ。何か外が騒がしいと思って来てみたら…」

「相良さんには、アーバレストの事もありますし、早く元に戻って貰わないと、隊としても、私個人としても困ります」

宗介は、テッサがなぜ個人的に困るのだろうか…、と思ったが、いくら考えてもサッパリ分からなかった。

「キョンの方には連絡したのか？」

とキョン姿の宗介が古泉に訊くと、

「ええ、先ほど電話で連絡しました」

「なら、問題ない」

間接に答えた古泉に、宗介も間接に答える。

「作戦決行はいつだ？」

「明日です」

古泉が答えた。

少々驚いた様にクルツが訪ねる。

「何でそんなに急がなきゃならねぇんだ？」

「同化してしまう危険があるからです」

「同化…って？」

「簡単に言うと、相良さんの精神とキョン君の肉体が融合する…という事ですね」

「…すると、どうなるの？」
今度はマオが聞いた。それに今度は長門が答えた。
「彼の肉体に相良宗介の精神が融合すると、肉体が精神に耐える事が出来なくなり、最悪の場合、死に至る。それは相良宗介の肉体も同じ」
その言葉に最も反応したのはテッサだった。
＞ウィスパード＜にも、似たような事があるからだ。
いくつかの条件が揃うと、＞ウィスパード＜同士は＞共振＜する事ができる。
精神の深い部分で思考を共有する事が出来るのだ。
しかしそれは非常に危険が伴う。
一歩間違うと、自分が誰か分からなくなるからだ。
それだけでは無い。
＞ブラック・テクノロジー＜を知ろうとするたびに、＞ウィスパード＜だけが聞く事の出来る＞囁き＜が、体を乗っ取ろうとするのだ。
そしてテッサは、＞囁き＜に乗っ取られて死んでしまった人を知っている。
それ故に、一段と緊張した表情をしていた。
そんなテッサの反応を知ってか知らずか、古泉がキョン姿の宗介に聞いた。
「その体になってから、感覚が鈍ったとか、この辺の地域に既視感

を覚えただとか、その様な症状はありませんか？」

「…肯定だ。確かに、最近その様な症状がある…」

「既に同化が始まっている様ですね…。キョン君の方も、既に同程度の症状が出ていると見た方が良いでしょう」

「では、急がないと！」

テッサが、キョン姿の宗介を心配する顔をしながら言った。

「そうゆう事ですね。明日の放課後、キョン君が千鳥さんと共に来るそうなので、残りの話はその時にしましょう」

古泉がそう言って、その場は解散になった。

それから約一時間後…。

テッサは整備後のテスト潜航中の＞トゥアハー・デ・ダナン＜に無線連絡をしていた。

「アンスズよりＴＤＤＨＱへ。マデューカスさん、聞こえますか？」

『艦長。どうなされました？』

男の低い声が通信機から返ってきた。

リチャード・マデューカス中佐である。
マデューカス中佐は艦長であるテッサが不在の間、艦の指揮をとっているのだ。
「艦の現在地は？」
『メリダ島の南西、およそ８０ｋｍのあたりです』
「では、明日の１３００時迄に東京湾に来てください。私の艦なら問題無い筈です。到着した後、潜望鏡深度まで浮上して、私の連絡を待って下さい」
『了解しました。しかし何故？』
「…予感がするからです」
テッサが息を飲む様に言った。
『予感…ですか？』
「はい。…もうすぐ大きな戦いが始まる予感がするからです」
マデューカスは少し間を開けてから、
『…さようですか。承知しました』
「それから、ＡＲＸ－７に＞ボクサー＜散弾砲を装備させて、弾道ミサイルでいつでも射出出来るよう準備。私の合図で射出して下さい」

『了解しました。念のために、クルーゾー中尉も緊急展開ブースターを装備したＭ９に待機させましょう』

「お願いします。マデューカスさん。交信終了」

そう言ってテッサは通信を切った。

そしてテッサは少し考え込んでから、誰に言う訳でもなく呟いた。

「私の考えすぎなら良いのだけど…」

第６章～戦隊長の特殊任務～（後書き）

連休中の出来事は、長編が終わってからにしたいと思います。
すいませんｍ（　　）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9728f/

涼宮ハルヒの驚爆～替わる・ワンジョイン・ウィーク～

2010年10月9日18時10分発行